# 歯学部ニュース

令和４年度第２号（通算142号）

特集　歯学部卒業おめでとう
歯学部学生の様子
留学に行こう

# 目　　次


**特集 1　歯学部卒業おめでとう**……1
学部長から　前田　健康
副病院長から　多部田康一
卒業生から　佐藤　大地・靄　利宗・中田　晴香・恩田　咲良・池　遥華・吉村　実玖
令和 4 年度　歯学部卒業生名簿
**臨床研修修了にあたり**……12
嶋田ひかり・植田　優太
**総務委員会だより**……14
前田　健康
**特集 2　歯学部学生の様子**……17
小林　理玖・宗田菜穂子・田中　佑樹・高橋まりあ・西村　隆之
清水　香奈・芦原　郁也・小杉　沙綺・小泉　瑠果・大出　怜子
丸山さくら・山崎　陽菜・小池　萌子
**部活動紹介**……30
軟式野球部　高津　彰史・江戸千家茶道部　渋澤　真舟
**特集 3　留学に行こう**……32
岸本　直隆・高橋　直紀・中島麻由佳・田村　光
**早期臨床実習を終えて**……38
髙野　日菜・富高　愛
**ポリクリを終えて**……40
近藤裕次郎・中嶋　優晶
**素顔拝見**……42
竹原　祥子・Angela Quispe-Salcedo・兒玉　匠平・吉村　将悟・都野　隆博
**留学生紹介**……46
Witsanu Yortchan
ZHENG ZHUOYANG
**退職によせて**……49
小野　高裕・高橋　英樹
**論文紹介**……53
照沼　美穂
**学会受賞報告**……54
小野　高裕・水越　優・高橋　直紀・青森　裕大・小野　喜樹・土橋　梓・中村　夢衣
**技工部だより**……61
長谷川健二・木村　修平
**新潟歯学会報告**……63
大島　邦子
**同窓会だより**……64
野内　昭宏・有松美紀子・塚田　哲也・松川　由実
**ミニコラム**……69
**歯学部を支える方々**　清野　暁・小野　雅生
**教職員異動**……71
**編集後記**……73

特集１　❑歯学部卒業おめでとう

# 卒業を祝して

歯学部長　前　田　健　康

歯学科第53期生の皆さん、口腔生命福祉学科第16期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日めでたくご卒業される皆さんに、歯学部教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、卒業の日を一日千秋の思いで待ち焦がれていたご家族、保護者の皆様方のご尽力にも敬意を表するとともに、今日の卒業式を無事に迎えることができましたことを心よりお祝い申し上げます。

新型コロナウィルス感染症に対するさまざまな対策が取られる中、本学歯学部教育の総仕上げといえる臨床実習、現場実習を終了し、卒業生の皆さんは、本日、学士の称号を与えられました。卒業生の皆さんは、この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、福祉職、行政職、大学院への進学等、さまざまな道に進まれます。各人の進む道は異なるものの、歯科医学・医療、口腔保健・福祉に携わり、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

VUCAという言葉を知っているでしょうか？VUCAはvolatility（変動性）、uncertainty（不確実性）、complexity（複雑性）、ambiguity（曖昧性）の頭文字をとった造語で、先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態を意味します。現代は技術革新、テクノロジーの進化により、あらゆるものを取り巻く複雑性を増し、将来の予測が困難な状況となっています。VUCAは、元来、軍事用語としてできた用語ですが、昨今の社会情勢が激しく変化し先行き不透明な社会情勢を指して、使われるようになりました。このVUCA時代には、想定外のこと（例えば新型コロナウィルスの流行や地球温暖化に伴う気候変動や異常気象など）が次々に起きる、今までの常識が非常識になる、業界の概念を覆すサービス（例えばUber）の登場が起こってきています（村尾佳子：グロービス経営大学院教授副研究科長）。すなわち、VUCA時代は「今まで通りの延長線ではない時代」であることを意識して、活動していくことが求められます。村尾氏は、テクノロジーの理解と情報収集力、自らの頭で考える力、ポータブルスキルがVUCA時代の人材に必要な３つのスキルであると述べています。歯科医療、保健・福祉の世界でもデジタル化が急速に進んでいます。AIが急速に進化し、さまざまな職業がAIやロボットに代替されると考えられており、私たちは我々にしかできない考える力を高めていく必要があります。ポータブルスキルは特定の業種や職種、時代背景にとらわれることのない汎用性の高いスキルのことで、これはどの分野でも必要とされる市場価値の高い人材をいいます。VUCAの時代は曖昧な物事や未知の事象に意味付けをし、自身で答えを出す動き方やマインドセットするスキルが求められています（https://next.rikunabi.com/journal/20211014_t01/）。

総務省統計局によれば、我が国の総人口（2022年９月15日現在推計）は、前年に比べ82万人減少している一方、65歳以上の高齢者人口は、3627万人と、前年（3621万人）に比べ６万人増加し、過去最多となりました。また75歳以上人口（後期高齢者）の割合は15.5%（0.6ポイント増）、80歳以上人口も9.9%（0.7ポイント増）にも達しています。このような人口構造が変化するとともに社会構造も変化し、医療に求められる社会ニーズも大

きく変化しています。今までの歯科医療も健常者型から高齢者型へ大きく転換することが予測され、またデジタル機器の活用やビックデータに基づく医療の実践などが求められ、歯学教育もまた大きく変わりつつあります。このため、文部科学省では歯学教育モデル・コア・カリキュラムを大幅に改訂し、令和6年度入学生から新たなカリキュラムで教育が始まります。皆さんが新潟大学歯学部で4ないし6年間で学んだことは、今この時代の医療技術、社会ニーズをベースとした教育プログラムに基づいたものです。この先、技術革新、社会構造の変化が進めば、その時代に求められるスキルや知識も当然変わっていきます。「大学卒業＝学びのステージの終了」ではありません。この先も学び、社会人としての成長と進化を続けましょう。変化し続ける社会ニーズを敏感にキャッチし、それに応えられる社会人であり続けましょう。

社会は口腔医療・保健・福祉のプロフェッショナルとなる皆さんに対して、常に幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感を求め続けます。また、社会は専門的知識やスキルを維持・向上させる責任も求めるため、皆さんにはさらに一層の常日頃の精進が不可欠となります。皆さんが社会から認められるためには、今日この日に、改めてこれからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめながら、プロとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。学而不思則罔（学びて思わざれば則ち罔し：人から学んだだけで、自分で考えることをしないと、何もはっきりとはわからない）です。

本日、新たな夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、我々教職員一同はこれからも熱意を持って、応援していきたいと思います。卒業する皆さんには、折を見て母校を訪ね、また生涯の学習の場として、これからも新潟大学歯学部を積極的に活用していただけるように願っています。皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部は競争が激化している歯科界の中で、高い評価を受けています。すばらしい教育資源を有しています。我々教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、活躍して下さい。皆さんの今後の活躍を大いに期待してします。

# 卒業を祝して

医歯学総合病院　副病院長（歯科総括）　多部田　康　一

歯学科53期生・口腔生命福祉学科16期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。長い間の努力を経て新潟大学歯学部の教育課程を修了し、学士の学位を取得された皆さん、そして卒業生を支えてこられたご家族、ご親族の皆様に心からお祝い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により皆さんの学習や大学生らしい日常生活においても様々に大変な不自由が強いられました。現在もその影響は続きますが、2019年当初の未知なる感染症の脅威に対して感じた不安は和らぎつつあります。歯科治療は口腔からのエアロゾルを発生させる処置が多く、新型コロナウイルス感染症に対して高いリスクが懸念されましたが、十分な問診と標準予防策を講ずることでリスク低減を図ることができることを学びました。実際に現場で危機感を持ちながら臨床実習に臨んだ皆さんにとっても、標準予防策の重要性を直接的に認識する有益な学びの機会となったと思います。このように現場で経験をすることは実学として何よりも重要です。これまで歯科医学、口腔保健医療・福祉を学び、今、専門的職業人として社会で活躍するスタートラインに立った皆さんは、これまで大学においては、不変的に重要な知識や基本的技能の習得を中心として学んできました。これからさらに現場で学び、経験しながら、成熟したプロフェッショナル職業人へと成長してゆかなくてはなりません。優れた良き医療人として活躍し、社会に貢献してゆくために、自己研鑽を継続する努力を怠らないでください。

現存の医療技術や医療・社会福祉のシステムにおいて、皆さんがそれぞれの環境で専門職業人として働く社会貢献に加えて、時代の変化に合わせてさらなる改善と発展を求めることも目指していただきたいと思います。若い皆さんの積極的なチャレンジ、既存概念にとらわれない発想や多様な個性の発揮には自身の成長だけでなく、社会におけるイノベーションの創出を生み出す可能性があります。新潟大学歯学部を卒業した学士として高い志を持ってください。

今、卒業した皆さんは将来どのように働いてゆくか、これまで試験の準備に忙しく考える時間もあまり無かったかもしれません。是非、おおよそ５年後、10年後と具体的に目標を定めてください。目標達成による自己実現を行いながら、医療・社会福祉に関わり社会へ貢献してゆかれることを期待します。新潟大学歯学部・医歯学総合病院教職員一同は、皆さんを応援しています。

# 卒業生から

## 卒業生から

歯学科６年　佐　藤　大　地

新潟大学での大学生活も、いよいよ卒業が目前となりました。

６年間というとても濃密な学生生活を振り返ると、あっという間に感じます。

この６年間で特に印象に残っているのは、部活動と臨床実習です。

私は大学１年生から３年生まで五十嵐キャンパスの吹奏楽部に所属していました。毎年の夏のコンクールに向けて部員一同で切磋琢磨し、意見を交わし、時にはぶつかり合い、より良い演奏を探究しました。また、冬の定期演奏会では、お客様を満足してもらえるような演奏に演出を加え、感動を与えるステージを実現できたと感じました。

特に印象に残っているのは、介護施設での訪問演奏会です。

高齢者が毎年楽しみにしている演奏会で、客層にあった歌謡などの吹奏楽アレンジ曲を小編成で演奏しました。目前でお客様にとても喜んでもらい、涙ぐむ人もいて演奏のやりがいを感じました。

こうして繋がった仲間達は、私の人生にとってもかけがえのない存在となりました。

また、臨床実習ではこれまでの歯学部生活を凝縮したようなあっという間の１年でした。一口腔単位での治療方針を決定し、患者様と相談しながら治療を進めるという、実際の臨床での歯科診療を体験できました。特に治療計画の立案では教科書的に学んだこと以上に臨床での症例は難しく、悩み考えることも多くありました。しかし、各診療科のライターの先生をはじめとした主治医や指導にあたってくれた先生方とのディスカッションで見方や考え方が変わり、多角的な方面から捉える力が身についてきたと実感しました。

専門診療科での外来見学でも、一つ一つの医療行為の細かいテクニックや知識を目の当たりにし、歯科医療の奥深さを知りました。それぞれの医療行為にきちんとした根拠があり、それに基づいて診療を行っていることが実感できました。

こうして臨床実習を振り返ると、この１年で歯科医師として必要な技術や知識、考え方も大幅に成長できたと感じます。学生の臨床実習に協力してくださる患者様や各診療科の先生方、大学や病院のスタッフの方々のおかげで、こうして臨床実習を最後までやり遂げることができたのだと思います。

まだ歯科医師となるには足りないくらい未熟ですが、この６年間色々な場面で多くの人の支えがあったからこそ、こうして卒業できるのだと思います。ここで培われた力を糧に、さらに自己研鑽に努めていきたいと思います。改めてこの大学生活で携わってくださった皆さまに深く感謝し、今後の歯科医療に貢献できるよう、努力して参ります。

臨床実習を共にした友人
撮影時のみマスクを外しました

# 卒業生から

歯学科６年　靏　　利　宗

この度、歯学部ニュースを執筆させていただきます靏利宗です。現在11月ですが、国試勉強の合間の息抜きに書かせていただきますので、どうぞお気軽にお付き合いください。

2017年の４月より、此処新潟で暮らすようになって早６年、福岡出身の私にとってこれまでの日々はとても新鮮で思い出深いものになりました。新潟の街の雰囲気や人々、美味しい食事、冬の雪景色、そのどれもが刺激的で、たくさんの思い出が昨日のことのように思い出されます。新潟に残れないのは残念ですが、また何度でも訪れたいと思います。

前置きが長くなりましたが、本学入学から臨床実習を終え、国家試験間近という現状の私が感じたことを書き連ねていこうと思います。

１年生の間は、２年生以降に比べてかなり自由に過ごしていたことを覚えています。総合大学ならではということもあり歯学科以外の学生と交流したり、時間に余裕があったので複数のアルバイトを掛け持ち、「見聞を広める」ということを意識しておりました。６年になった今でも、その時に知り合った方々と連絡はとり合っていて、最近だと面接試験などの相談で特にお世話になりました。またアルバイトについても、相手のニーズを理解してそれに応えるということや、わからないことに対する取り組み方を知り、その経験は特に臨床実習で活きたので、やっていてよかったなと思いました。

２年生以降は、専門的な学習が始まり、最初の方は勉強についていくのがかなり大変だった思い出があります。６年生になって気づきましたが、学生と先生方との距離は案外近いもので、講義でわからないことについて、もっと早く相談しに行けば、理解に苦しむこともなかったのかなと、少し後悔はあります。

５年次後期からの臨床実習は、専門的な内容はもちろんのこと、あらゆる面で学びが多い一年となりました。一つの組織として働くアルバイトとは異なり、各科の先生方はもちろん、その他多くの方々が勤務なさっている大きな組織の中で、歯科医師としての経験を積むことができたのはとても有意義なものでした。最初のうちは失敗ばかりでしたが、周りの方々に支えていただき、組織で働くということを肌で実感しました。ほとんど初めてのことばかりだったので、最初は失敗も多く、本当につらいことばかりでしたが、この一年を振り返ってみると、研修医になる前に数多くの失敗を経験できて良かったなと今では思います。また、患者さんへの処置を担当させていただけるため、教科書を読むだけよりも、いっそう主体的に物事を考えることができ、実際に目で見て診査することで、理解も深まりました。この一年で学んだことは、今後に必ず活かしていきます。

最後になりますが、この６年間、ご指導いただきました先生方、同期のみなさん、支えてくださった沢山の方々に深く御礼申し上げます。

# 卒業にあたり

歯学科6年　中　田　晴　香

本大学を卒業するにあたり、6年間を振り返ると、様々な出来事が思い出されます。このような執筆の機会を賜りましたので、深く印象に残った実習について書かせていただこうと思います。

3年生の後半から模型実習が始まりましたが、不器用な私はかなり苦戦しました。自身の至らなさに落胆し、歯科医師を志したことを後悔した日もありました。

実習に前向きに取り組むことができるようになったきっかけは、5年生から始まった臨床実習でした。今までの実習と異なり、治療技術の向上だけでなく、患者さんとの関わりのなかで、基礎と臨床を結び付け治療方針の妥当性を検討し、明快な言葉で説明するための知識、態度が総合的に求められました。

患者さんは優しく、長時間の診療後も笑顔でお礼を言ってくださいました。そんな患者さんに対して、良い補綴装置を製作し喜んでいただきたいという思いが強くなるほど、恐れや後ろ向きな気持ちが減弱していくことを感じました。練習や技工操作で行き詰りそうな時も、患者さんの顔を思い浮かべれば頑張ることができました。医療を通して人の役に立ちたいという気持ちが、活力となることを実感した瞬間でした。

最初は不安で長く思えた1年間の臨床実習は、目の前の治療に追われるうちにあっという間に終了しました。在学中に患者さんと関わり治療する機会をいただけたことは、今後にも活きるかけがえのない経験となったと感じています。お忙しいなか、ご指導くださった先生方に深く感謝を申し上げます。診療中、診療時間外問わず丁寧にご指導くださった先生方から、知識に加えて医療従事者としてのあるべき姿も学びました。新型コロナウイルスの感染拡大が止まらぬ状況で、様々な制限がありながらも実習継続に尽力してくださった先生方のサポートがあり、無事に臨床実習を終えることができました。

重ねて、同期にも感謝の気持ちを伝えたいです。6年という長い期間、苦楽を沢山共有しました。同期の皆がいたからこそ、挫けそうな場面も乗り切ることができました。辛いときに寄り添い、背中を押してくれた同級生の存在は、卒業後も変わらず自分を支え、鼓舞する存在となり続けると実感しています。

学生生活の全てが貴重な経験となりました。上達の喜びと、できない悔しさの両方を忘れずに、卒業後も精進します。

最後になりますが、卒業と同時に歯科医療のスタートラインに立つ私たちを、引き続き応援していただけますと嬉しいかぎりです。

クラスメートと撮影
撮影時のみマスクを外しました

## 暖かい春を待ち侘びて

歯学科6年　恩　田　咲　良

「卒業生から」というテーマで約5年ぶりに歯学部ニュースの執筆依頼をお受けしました。5年前の執筆内容は「入学者のことば」。こうしてみるとあっという間だったのだと感じています。過去の歯学部ニュースを片手に6年間を振り返ってみると、勉学、部活動、飲み会等様々な思い出がよみがえってきます。隣人のどんちゃん騒ぎに耐えながらテスト勉強に勤しんだ2年の夏、オールデンタルで団体戦優勝を飾った3年の夏、日本酒が美味しいあまりに実家でつぶれた6年の夏、一部忘れたいこともありますがそれなりに楽しい大学生活を味わえたと思います。しかし私含めほとんどの6年生は「臨床実習」が思い出の大部分を占めているのではないでしょうか。そしてその思い出の写真にはマスク姿の自分が多く写っていることと思います。大学時代の半分が新型コロナウイルスとともにあった私たちは、当然ながら臨床実習も影響を受け、様々な制限下での実習を余儀なくされました。診療を延期せざるを得ないこともあり、不安を覚えることもありました。しかしそのような中いかに充実した実習となるか熟考してくださった先生方や、嬉しいことも悲しいことも共に経験し、一緒に乗り越えてくれた6年生、すでに社会で活躍している口腔生命福祉学科の同級生のみなさん、そして一年間こんな私を信じて担当させてくださった患者さん方のおかげで今後の糧となる貴重な一年間を過ごすことができました。特に印象深かったことは、5年生への引継ぎの際涙目になりながら別れを惜しんでくださった患者さんがいらっしゃったことです。患者さん一人一人の口腔内に対して、患者さんの情報を元に問題点を列挙し、グループで話し合って治療計画を立てるといったことは講義の一貫で経験したことはありますが、その結果患者さんがどう感じてくださるのかを体感できたことが臨床実習の醍醐味なのではないかと感じました。みなさん、本当にありがとうございました。

そして今は国家試験の勉強に勤しんでいます。幸いにも現在の隣人は静かな方のようで家でも集中できそうです。数か月後、全員で国試に合格し、期待に胸を膨らませる研修生の春、という思い出がまた増えますようにと願いながら最後まで気を抜かずに過ごしていきたいと思います。まずはみなさん体調には気を付けて、一緒に頑張ろう！！

頼もしい同級生との一枚

# 卒業にあたり

口腔生命福祉学科４年　池　　遥　華

この４年間を振り返ると、様々なことを知り、たくさんの新しいことを経験できた、とても貴重な時間であったと感じています。

私は田舎育ちであり、入学当初は電車に乗るのも、バスでSuicaをピッとするのもワクワクしていたことを思い出します。２年次からは旭町キャンパス周辺へ引っ越し、徒歩圏内にコンビニ、古町、万代、和菓子屋さん、かき氷屋さんなどなんでもある土地へ住むことができ、小、中、高時代では考えられないような生活を経験することができました。時間を見つけては色々な所へ付き合ってくれた友達には感謝しています。また、部活動では管弦楽団に入部しチェロを始めました。ピアノしか経験がなくチェロは全くの初心者でしたが、先輩方に教えていただきながら練習し、小学生の頃からの夢だったオーケストラでの演奏を経験することが出来てとても嬉しく思っています。

そして、学生の本業である学業についてです。入学時は福祉にはあまり興味がありませんでしたが、実家が福祉サービスを利用するようになったこともあり、福祉の授業も興味を持って聞くことができました。いつ誰が利用するようになってもおかしくない、福祉サービスについての知識や、福祉実習を通して実感した福祉に携わる人の優しさなどを学ぶことが出来、とても価値ある学びになりました。歯科については、一番印象に残っているのは臨床実習です。自分が術者となり処置を行ったり、診療補助を行ったりしましたが、自分の知識や技術が足りず、患者さんや先生にご迷惑をおかけすることもありました。毎日の実習を通して少しずつ成長することができましたが、それは病院の先生方や衛生士さん、口腔生命福祉学科の先生方や同期の皆などたくさんの方の支えがあったからです。お世話になった全ての方に、この場を借りて感謝申し上げます。

歯科に福祉にと忙しい日々でしたが、２分野の知識を学べたことはどちらの道へ進んだとしても強みとなると感じています。ここで学んだことを活かして、社会に貢献できる社会人になれるよう頑張っていきたいです。

実習最終日に　撮影時のみマスクを外しました

筆者：中央右　部活の同回生と　撮影時のみマスクを外しました

## 卒業にあたり

口腔生命福祉学科　4年　吉　村　実　玖

口腔生命福祉学科に入学して4年目となり、あっという間に卒業の年を迎えました。この1年は、臨床実習、福祉実習、特論、就活、歯科衛生士と社会福祉士の国家試験があり、毎日があっという間に過ぎていきました。

臨床実習では、思うように診療補助を行うことができない日々が続き、自分の知識・技術の不足を痛感させられました。しかし、同じように頑張っている口腔16期生のみんなのおかげでここまで実習を乗り越えられたと思います。最近では、患者さんにPMTCをさせていただいたときに「ありがとう！頑張ってね！」などと声をかけていただき、とてもやりがいを感じることができました。臨床実習で得ることができた経験を今後に活かしていきたいです。

福祉実習では、私は障がい者の方に対して相談支援を行う事業所で実習をさせていただきました。座学の講義を受けただけではあいまいだった障害福祉サービスを、実習を通して実際に見学させていただいたことで、しっかり知識として理解することができました。利用者さんとも沢山交流することができ、とても良い経験をさせていただいたと感じています。

口腔16期：臨床実習終了日に撮影
撮影時のみマスクを外しています

弓道部：2021年度夏季学部戦
撮影時のみマスクを外しています

そして、私が所属していた弓道部についてです。新型コロナウイルスの流行により、多くの大会が無くなりました。しかし、部活を通してたくさんの仲間に出会うことができました。歯学部だけでなく、保健学科の弓道部と一緒に練習していたため、他学部の仲間にも出会うことができました。

4年間、様々なことがありましたが、入学して一番良かったと思うことは、沢山の仲間に出会えたことです。充実した大学生活を送ることができたのは、口腔16期の同期のみなさん、部活動の仲間のおかげだと思っています。ありがとうございました。大学生活で得られた経験を活かし、自分の理想とする歯科衛生士像に近づけるよう日々精進してまいります。

# 令和 4 年度　大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

| 博士の専攻<br>分野の名称 | 氏名（専攻） | 博士論文名 |
|---|---|---|
| 博士（歯学） | SUEBSAMARN ORAKARN<br>（口腔生命科学） | In-process monitoring of a tissue-engineered oral mucosa fabricated on a micropatterned collagen scaffold: Use of optical coherence tomography for quality control<br>（マイクロパターン化コラーゲン足場材で作製した培養口腔粘膜のインプロセスモニタリング：品質管理のための光干渉断層撮影の使用） |
| 博士（歯学） | KULVANICH SIRIMA<br>（口腔生命科学） | Impact of Oral and Swallowing Function on the Feeding Status of Older Adults in Nursing Homes<br>（施設入所高齢者の口腔と嚥下機能が食事状況にもたらす影響） |
| 博士（歯学） | SUZUKI BARRERA KIYOKO NÉLIDA<br>（口腔生命科学） | Role of osteopontin in the process of pulpal healing following tooth replantation in mice<br>（マウス歯の再植後の歯髄治癒過程におけるオステオポンチンの役割） |

# 臨床研修修了にあたり

## 臨床研修終了にあたり

Aコース臨床研修歯科医　嶋　田　ひかり

臨床研修Aコースにて研修をしております研修歯科医の嶋田ひかりと申します。研修も残すところ３カ月となり、思い返してみるとアッという間に時が過ぎてしまったのをしみじみと感じている今日この頃です。せっかくAコースで研修させていただいておりますので、ここでは私が臨床研修Aコースに在籍して感じたAコースの良さについて書かせていただきたいと思います。研修先や進路に悩む後輩たちへ少しでも参考になれば幸いです。

Aコースの特徴の１つ目として、１人の患者さんにかける時間が十分にあることが挙げられます。開業医等では限られた時間のなかでパフォーマンスを求められることがあり、研修医の実力では自分で納得ができるレベルまで診療の質を持っていくには限界があります。もっとこうしたい、こっちのほうがよりよくなるのに、といった思いを抱えながら患者さんにお帰り頂くことがないので自分の診療レベルを都度確認しながら診療を行うことができました。今はうれしいことに１診療にかける時間がだんだんと短くなり、技術面も少しずつですが向上しているという実感を得られています。

２つ目として、大学病院という恵まれた環境のおかげで上記の理由で省略されやすい診療ステップや、使用する材料の選択を限られることがないこと、また調べたり相談したりしやすい環境であるため事前の予習検討をしっかり行え、自分が思う症例へのベストを尽くせることが挙げられます。わからないことや困りごとがあると、上級医の先生がフォローしてくださったり、親身に相談にのってくださったりしたのでよりよい治療計画、目標を立てエビデンスに返り納得しながら診療に取り組むことができました。

11月に行われた総合歯科学会に参加する機会をいただいたのですが、そこで大会長の先生に「やっぱり新潟大学の研修のレベルは高いね」と声をかけていただいたのが今でも印象に残っています。

臨床技術は今後経験を積み重ねて上達していくものかもしれませんが、患者さん特有の口腔に対するアプローチの仕方、などといった症例への考え方は事前の十分な予習を前提にこういった恵まれた環境のなかで培われ、今後の歯科医師人生の基盤になる財産であると日々の診療を行いながら確信しています。

最後に、これまでご指導していただきました先生方や衛生士さんにこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。たくさんの支えがあって研修できることに感謝しながら残りの研修医期間も自己研鑽に努める所存です。歯科の学生でもなく、歯科医師でもなく、研修歯科医として学べるこの期間と立場を使って貪欲に励んでいきます。

# 臨床研修修了にあたり

B-1 コース臨床研修歯科医　植　田　優　太

この度歯学部ニュースの執筆を賜りました、本学52期　Bコース研修医の植田優太です。大学卒業後は４月から９月まで新潟大学医歯学総合病院歯周病科にて、10月からは上越市にある新潟労災病院にて研修をさせていただいております。労災病院での研修がスタートして２ヶ月近くたった11月末に執筆しておりますが、だんだんと寒くなり、上越で過ごす初めての冬に恐々としております。

今までの研修生活を振り返りますと、前半の新潟大学医歯学総合病院での研修では、体系的な歯周治療を経験することができました。担当した患者さんの病態や特徴を分析し、治療計画を指導医とディスカッションをしながら立案、治療を行いました。そして自ら立てた治療計画や実行した治療の経過をパワーポイントにまとめていったことで、体系的な歯周治療の効果を学ぶことができました。一人の患者さんに対してとことん時間をかけて検討する機会を頂けたことは、何にも変え難い経験であるとともに、大学病院での研修だからこそできたことなのではないかとも感じております。技術面では、指導医から的確なアドバイスをもらいながら診療できたこと、自ら歯周外科治療を行う機会を頂いたことはとても貴重な経験だったと感じています。また先生方の診療を見学する機会を多くいただいたことで、技術や治療計画などで自分では気がつかないような視点・考えを得ることができました。

大学病院での研修があっという間に修了し、名残惜しさを感じながら10月から新潟労災病院での研修がスタートしました。大学病院での研修とは異なり、圧倒的な量の患者さんとスピーディーな診療が求められる状況がスタートしました。労災病院では主に入院または外来での智歯抜歯、手術、周術期口腔機能管理、入院患者さんの一般歯科治療など様々な症例を経験させていただいています。

自ら手を動かす機会が非常に多くなり、「うまくできない場合をどう解決するか」を考えながら診療を行うようになりました。「歯医者はとにかく手を動かさないとダメだ」という言葉を指導医に言われましたが、そのためには事前の準備や手技の予習が重要なのだと改めて気付かされました。

そうして予習や経験から学んだことをもとに診療に取り組み、抜歯などが上手にできた際には大きな達成感を得ることができました。

残りの研修生活においても今まで学んだことを活かし、研鑽に励みながら、有意義な研修生活にしたいと考えています。

最後になりますが、ご指導いただきました先生方、衛生士さんに感謝申し上げます。研修医として一年間学んだこと忘れず、今後も歯科医師として日々努力してゆきたいと思います。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

歯学部長　前　田　健　康

## 歯学部長の選任について

前田健康歯学部長の任期満了に伴い、歯学部長選考が行われました。歯学部長候補者推薦委員会で推薦された候補者から、歯学部教授会で２名の教授を選出し、学長宛に推薦しました。学長による２名の候補者の面談を経て、井上 誠教授が歯学部長に選考されました。任期は令和５年４月１日から２年間です。

## 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの採択について

海外から我が国の大学に留学する学生を国費外国人留学生として優先的に配置することにより、各大学において優秀な留学生を獲得する仕組みの構築を促すことを目的とする文部科学省事業「2022年度国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に採択されました。口腔生命科学専攻では、これまでASEAN地域を対象としたプログラム（毎年５名）、南米地域を対象としたプログラム（毎年３名）の２つのプログラムが採択されていましたが、ASEAN地域に対するプログラムが更新時期を迎えるにあたり、新たにASEAN地域を対象としたプログラムを申請し、文部科学省の選考委員会の審査を経て、この度採択の通知を得ました。受入開始時期は2023年10月を予定し、毎年５名３カ年（15名、延べ720ヶ月）の受入となります。

（https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/boshu/1423005_00003.htm）

## 令和４年度Student Dentist認定証授与式・臨床実習登院式について

令和４年10月12日（水）に、Student Dentist認定証授与式及び臨床実習登院式を行いました。Student Dentist認定制度は、共用試験（CBT・OSCE）の結果を基に、診療参加型臨床実習に必要な知識、技能、態度を有した学生が歯科大学学長・歯学部長会議及びスチューデント・デンティスト認定運営協議会からの認定を受けるものです。今年度は歯学科５年次の学生35名がStudent Dentistに認定されました。

授与式では、前田歯学部長から訓示があり、本学のカリキュラムにおける臨床実習の位置づけやStudent Dentist認定の意義などが述べられま

した。訓示後には、認定証及びネーム刺繍が入った診療衣が学生に授与され、代表学生からは臨床実習に臨むにあたっての決意が宣誓されました。授与式に引き続いて行われた臨床実習登院式では、多部田医歯学総合病院副病院長と藤井臨床実習実施委員長から、今後の臨床実習で実際に診療に携わる医療人としてあるべき態度や姿勢、院内・院外での心構えなどに関して説明があり、お話の最後には、「初心を忘れずに１年間頑張ってください」とエールが送られました。

## インド･サイブエサ歯科大学（https://saveethadental.com/departments-1）、ネパール･カトマンズ大学医学部（https://kusms.edu.np/bachelor-in-dental-science/）との部局間交流協定締結について

歯学部ではグローバル人材育成の目標の下、国際ネットワークの構築を進め、教員の学術交流、学生の交換留学を進めています。この度、インド・サイブエサ歯科大学およびネパール・カトマンズ大学医学部（歯学コース）から部局間交流協定締結の強い要望があり、手続きを進めてきましたが、この度、手続きが完了し、交流協定を締結しました。

インド・サイブエサ歯科大学はチェンナイにある私立歯科大学で、インドの歯学部で１位にランクされる歯学部で、照沼副学部長（国際担当）がチェンナイに赴き、部局間交流協定を締結しました。またネパール・カトマンズ大学はネパールの首都カトマンズにある公立大学で、医学部の中に定員50名の歯学コースが設けられています。顎顔面口腔外科学分野の冨原教授が長年にわたる口腔外科手術に関する医療貢献実績を元に、この度、交流協定を締結することとなり、前田歯学部長、冨原教授がカトマンズ大学を訪問し、交流協定を締結しました。両大学とも、教員交流に加え、学生交流など幅広い交流を望んでいます。またタイ・チュラロンコン大学歯学部との部局間交流協定も更新されました。

## 令和４年度大学改革プロジェクト経費の採択について

この度、令和４年度大学改革プロジェクト経費の申請結果について報告があり、学系ハンズオン事業として、「専門職教育の高度化」、フラッグシップ研究支援事業２件（「口腔がんに対する地域医療体制の基盤構築」、「創薬イノベーションを目指す感染症等の危機管理基盤の構築」）が採択されました。

「専門職教育の高度化」事業では、①共用試験の公的化およびデジタル教育の深化に対応した高等教育の質保証、②地域・国際連携教育によるグローカルな人材育成、③ダイバーシティーを念頭に置いた若手人材育成を行うこととしています。また「口腔がんに対する地域医療体制の基盤構築（実施主体：口腔病理学分野）」に係る取組では、

口腔細胞診を活用し、地域歯科医療を担う自治体・団体とともに、口腔がんスクリーニング実施の支援を行うとともに、口腔がん専門外来受診に結びつける地域連携システムを構築し、これを教育にも活用することで学生・若手人材の育成につなげることを目的としています。「創薬イノベーションを目指す感染症等の危機管理基盤の構築（実施主体：微生物感染症学分野）」では、新開発のマクロライド系の免疫調節薬により、安全安心な感染性肺炎の予防治療法を開発研究し、社会への貢献と創薬イノベーションを起こすとともに、人材育成を行うことにより拠点形成を目指すものです。

## 2022年度海外留学支援制度（協定派遣）の追加採択について

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が公募していた2022年度海外留学支援制度（協定派遣）の追加採択が通知されました。新型コロナウィルス感染症のため、学生の短期海外派遣ならびに外国人学生の短期受入ともに、ここ２年間、中断していましたが、2023年３月を目途に派遣・受入を再開することとしました。

## 文部科学省医学教育課によるFD講演会の開催について

令和４年11月28日に文部科学省高等局医学教育課堀岡企画官、降簱係長によるFD講演会が開催されました。講演タイトルは「歯学教育の動向等について」で、歯科医療・歯学教育をとりまく現状、歯学教育MODEL・コア・カリキュラムの改訂、共用試験の公的化、歯学教育の改善・充実、令和５年度概算要求・令和４年度補正予算等、多岐にわたる内容でした。新型コロナ感染症の蔓延後、対面での開催となりましたが、会場を歯学部講堂と第一講義室の２つに分け、両会場をオンラインでつなぎ、各室での聴衆が収容定員の半分以下になるよう感染対策に留意した上での開催となりましたが、約100名の教職員が講演を拝聴しました。またFD講演会の前には、医学教育課課員４名さらに内閣府浅野審議官が歯学部臨床実習の現場、基礎実習施設、デンタルシミュレータ、CAD/CAM実習設備を見学し、前田歯学部長らと意見交換を行いました。

# 歯学部学生の様子

歯学科 1 年　小　林　理　玖

私が新潟大学に入学してからおよそ一年が経ちました。今年は初めて経験することが多く、短いようで長かった一年でした。私が新潟大学歯学部に入学することが決まってからは新しく始まる生活に期待が膨らみました。まだ、新型コロナウイルスの影響もあり、非対面型の授業が多くありました。自分から話しかけることが苦手な私にとっては友達ができるかどうか不安しかなかったのですが、部活動と毎週金曜日に旭町キャンパスで行われる対面型の授業を通して友達を作ることができました。

私は現在、サッカー部と管弦楽団の 2 つの部活に所属しています。サッカー部は新潟大学に入学する前から入ろうと思っていました。サッカー部の部員数が少なかったということもあり、非常に歓迎されたことはとてもいい思い出です。高校の頃はサッカー部に所属していなかったので最初はブランクを感じていましたが、様々な学年の先輩と関わりながらサッカーを楽しむことができています。大学の授業に慣れ始めた 7 月頃は時間的に余裕ができたのでもう一つ部活に入ろうと思いました。私は小学生の頃からヴァイオリンを習っていたので管弦楽団に入ることにしました。私は、ソロでしか弾いたことがなかったので、オーケストラで周りの音を聞きながら自分の音と調和させて弾くことが非常に難しいです。まだまだ技術的に至らない部分が多いのでたくさん練習する必要がありますが、全員の音がそろった時の快感を糧に楽しく勤しんでいます。

新潟大学に入学にするまでは自分でお金を稼ぐということをしたことがなかったので、アルバイトで給料をもらうということが大学生になってやりたいことの一つでした。10月頃にサッカー部の先輩から紹介を受けて念願のアルバイトを始めました。最初は覚えるべきことがたくさんあり、社員さんに注意されることも多かったのですが、経験として学んだことも多くありました。例えば、私は居酒屋で働いているのですが、接客や電話対応など自分の行動一つ一つが店の印象に繋がるので、責任が伴います。よって、様々なことに気を配りながら丁寧に仕事をこなさなければなりません。このような経験は将来、歯科医師として働く上で、必要不可欠であると思うのでこれからも真面目に取り組んでいこうと思いました。

先輩方からよく「遊ぶなら 1 年生のうちだよ」と言われます。確かに、 2 年生以降は本格的に医療関係の授業が始まり、ほとんどが対面授業になります。アルバイトをたくさん入れて多くのお金を稼ぐこともとてもいい経験であると思いますが、 1 年生の時は友達と旅行に行ったりして多くの思い出を作り、 2 年生からの忙しい日々のために英気を養うことが大切であると思います。歯学部は 6 年間という長い道のりです。 1 年生で経験したこと、学んだことを生かしながら新しくできた仲間とともに様々な壁を乗り越えていきたいと思います。

# 歯学部学生の様子

歯学科１年　宗　田　菜穂子

早くも、入学して半年以上が経ってしまいました。気づけばもう2022年が終わってしまいます。ついこの間入学したばかりと思っていましたが時の流れはとても速く感じます。１年生全体のことはよく分からないので私や私の周りの様子を書きたいと思います。私が入学した2022年は新型コロナウイルスの流行から約３年が経った頃です。入学式も今年は３年ぶりに開催され、徐々にコロナウイルスによる規制が解かれ始めてきました。しかし、コロナ対策は引き続き行っていくのには変わりはありませんでした。前期の早期臨床実習は今年も病院へは入れず、先生たちがスライドを使って丁寧に各専門診療科の概要を説明してくださいました。新入生研修も今年は延期となりました。また、前期では他の教養科目等もほとんどがオンライン授業となり、まだコロナ感染の影響は大きいと感じられました。大学の授業を履修したり、オンラインで授業を受けたりと私にとって初めてのことばかりで戸惑っていたけれど、友達に助けられながら乗り越えることができました。後期に入ると対面授業も徐々に再開され、五十嵐キャンパスで講義を受講することも増えてきました。講義室に大勢で様々な学部の学生が一つの講義を受けるということができるようになり、総合大学である新潟大学に入学したという確かな感覚を得ることができました。私は少人数の講義も受講しているのですが、そこで直に他の学部や学年の人と意見を交換でき、またとない機会を得てうれしい気持ちになりました。

学業以外では部活に所属し、新たな出会いがありました。先輩や同級生にとても良くしてもらって楽しい日々を過ごしています。高校までの友人と違い、様々な地域の出身者がいて色々な地域の話を聞くようになりました。私は新潟が地元なのですが県外の同級生や先輩に新潟の印象を聞くと「風が強い」とか「折り畳み傘を手放せなくなった」、「新潟に来てから天気予報を信じなくなった」と異口同音に天気の悪さを口にします。確かに新潟の天気は変わりやすく崩れやすいものです。このように天気のこと一つとってもいつも当たり前だと思っていたことがそうではないと気づかされることが多々あります。

最後に、来年度はいよいよ専門科目の講義を受けることになります。今はまだ来年度のことは想像がつきませんが、気負わずに一つ一つ丁寧に取り組みたいです。

# 歯学部２年生の様子

歯学科２年　田　中　佑　樹

１年前の自分に今の自分の生活を見せたらきっと忙しさに驚くに違いない。２年生になって生活が180度変わったといっても過言ではないからだ。

私が１年生の時の生活というものは、本当に堕落した生活になってしまっていた。全休の日は昼過ぎに起きて特に何をするわけでもなく時間が過ぎ、夜遅くまでスマホをいじっていた記憶がある。

それが２年生になった４月以降、１限対面から始まり４限までみっちり授業という生活が始まった。私は実家暮らしであり、旭町まで１時間以上かけて登校している。この文章を執筆している11月も、苦手な朝にしっかりと苦しめられている。しかし、学校に行けばそこには同級生が集い、講義や休み時間があるというような、私が高校生だったコロナ禍以前の当たり前の生活があった。旭町での大学生活に２年生ながらわくわくした。

７月も終わり、夏休みに入ったが、１か月間にわたる前期期末テストが約30日後に迫っていた。しかし昔から家で全く集中することができない私は勉強に身がなかなか入らず、危機感だけが募っていった。そこで、大学の図書館を利用し、無理矢理そこに自分を拘束することに決めた。するとそこには同じ歯学科２年の友人がたくさんいた。その友人たちとわからないところを教えあい、理解度がどんどん深まっていった。朝から夜まで図書館にいるサイクルを夏休み中は毎日続けたが、これが続けられた理由もやはり友人たちの存在が大きかった。夏休みが終わった後も図書館はますます熱気を帯びていき、２年生の数は増えていった。みんな自分なりの勉強法を持っており、その意識の高さに目を見張った。定期試験対策とは比にならない大変さが予想される国家試験の勉強。その大変さ、苦しさは２年生の私にとってはまだ想像もできない。しかしこの同級生たちと一緒に国家試験に挑めば、何も怖いものはないとこの時思った。

もがきつつなんとか試験期間を乗り越え、10月になった。少しは暇になるかな？と思いきや、テストや実習等のレポートに追われてそんなことはなかった。しかしグループワークが増えたことで一層同級生間の交流が盛んになったような気がする。私もあまり話したことのなかった同級生と話す機会が増えてとても嬉しかった。

11月。私たちの学年は、部活では幹部としてまとめていく立場になっていく。数々の部活で代替わりが行われ、私は軽音楽部の副部長として１年間頑張ることになった。正直人の前に出ていくようなタイプではない私に務まるのかは不安であるものの、大好きな音楽を不自由なくでき、みんなとライブを楽しめるという幸せを噛みしめながらやっていきたい。

３年生以降はより専門性が高まり、歯科医師になる自覚が強く芽生えていくと思う。どんな時でも「良い歯科医師になる」という軸がぶれることなく、そして不自由なくこの新潟大学歯学部に通えるということに感謝しながら毎日を過ごしていきたい。

# 歯学部学生の様子

歯学科２年　高　橋　まりあ

２年前期の対面での基礎系専門科目の期末試験が終わり、早くも２ヶ月が過ぎました。前期期末試験は１年次に比べて試験教科数も多く、１つ１つのテストの難易度も高いため、いかに日々の予習復習が大切か思い知らされました。

前期期末試験も無事終え、10月から始まった後期の授業では前期と比べ、実習が増えたことが何よりも大きな変化であったと思います。実習では毎回実験レポートが課されるだけでなく、前期の授業内容をしっかりと理解していなければならないものもあります。あまり専門系のレポートを書き慣れていない、前期の授業の理解に穴が空いているため、日々の学習に凄く時間が掛かってしまっているのが現状です。ですが、実習を通し、学習した内容を自分の手で実験し、結果を考察することができるため、知識の定着、理解の向上に繋がっていると思います。また、グループでの活動により、今まであまり関わらなかった人たちとのコミュニケーションが増えました。様々な人とのコミュニケーションの中で、自分が間違えて理解している部分があることや他にもこんな実験考察があるのだと気づくことができました。多くの人と積極的にコミュニケーションを図り、お互いに高め合う学科の同期をこれからも大切にしていきたいです。さらに３年生になると歯科の分野に特化し、内容も難しくなっていくと思うので２年の授業内容しっかり復習し、３年を迎えたいです。

また、私事ではありますが現在医学部の方の空手道部の副部長をしています。２年生になり学業も大変になってきた中で部活を引っ張らなければならないプレッシャーは自分の中で大きかったのですが、同期や後輩、先輩にもアドバイスを頂きながら良い雰囲気作りができています。

他にも今年10月に「にいがた観光親善大使」に就任したことが今年度印象に残っています。主にInstagramやFacebookなどのSNS、県内外のイベントに出席し、新潟市や県の観光PRを行なっています。そもそも歯科医師として、育った新潟で働きたい私にとって大使の活動は、多方面から新潟について学ぶチャンスであり、将来のキャリアにもつながると思い応募しました。大使の活動の中で、普段なら関わることのできない職種の方や人生経験の豊富な大人と関わることは同年代の子たちとは違った貴重な経験ができていると思います。任期の１年間、学業や部活動と両立させながら引き続き頑張ります。

新型コロナウイルスの影響で思い描いていた学生生活を送れていないかもしれませんが、学生生活の１日１日を大切にし、最大限楽しみたいです。

部活動時の様子

# 異色な歯学部３年の様子

歯学科３年　西　村　隆　之

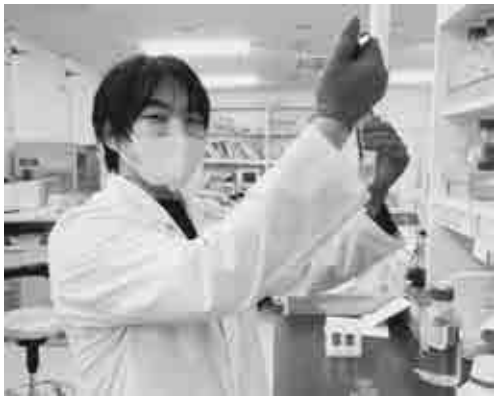
歯学部ニュースをご覧のみなさん、こんにちは。歯学科３年生の西村と申します。歯学部ニュースの記事を寄稿いたしますのははじめてですが、駄文にお付き合いください。入学してから３年経過したのにもかかわらず、恥ずかしながら歯学部ニュースを目にしたのが寄稿のこの機会が初めてになります。なにを書こうかと考えまして、ネットに公開されています平成７年度から歯学部ニュースを拝見しました。すると、私も知っている先生方が学生の頃に寄稿されたものが出てきて…その先生方の学生の頃も苦労されていたのだなと知ると、やっとこさ３年後期からはじまりました実習を四苦八苦している現状はだれしも通るのだなと知りました。落ち込まずに気合で、乗り切っていくぞ！

さてこれから、本題の３年の学生生活の様子について書きたいと思います。といっても、私は部活に入り居酒屋でバイトする“The大学生活”を謳歌しているわけではありません。では、西村君は普段なにをしているの？ひまなのか？ーいいえ、研究室におります。２年生になり専門科目が対面講義で始まり、難しいけれども意外におもしろいなと思っていたところに人体発生学を教鞭されている口腔解剖学分野の大峡淳教授から研究室の手伝いしてくれる人を募集していると情報があったので、メールを送らせて頂きました。

当時、入試が物理選択で、生物がさっぱりな私でしたが教授や川崎先生から実験手法や考え方など教えていただき、遺伝子改変マウスにおいて引き起こる異常の形態学的な解析から、改変した遺伝子の各器官の発生メカニズムを探るプロジェクトの一つを進めています。

人の遺伝子を１から作ると、普通に考えて胎児のときにしっぽや水かきが存在するはずがなく元から手を作ればよい。しかし、胎生期にそれらは存在しわざわざアポトーシスでなくなる。別の例で有名なものでは、人が猿だったころの名残である長掌筋、ダーウィン結節や歯科では親知らずがない人がいる（私ですが）。今はあまり使わないから、なくなった人もいるといわれています。そもそも必要ないものをはじめから作る必要はないとおもいますが、ある人やない人がいるということは私たち人類も進化の中にあると実感できます。遺伝子変化によって浮かび上がってきた現象を知ることは、マスキングの下にかくれている進化を垣間見る、そんな活動です。発生学じゃなくても良いでしょう。もし、後輩でちょっとでもこの授業はおもしろそうだなとおもったらメールを先生方に送ってみてください。大峡教授だけでなく、どの先生方も歓迎してくださるとおもいます。

最後に、私は関西出身でありあまり雪に慣れていません。この文章を書いている日に初雪でした。１年生では、新潟にいなかったため未だ新潟の冬に慣れているわけではありません。積雪すると、毎日登校が大変だと思いますがこの中を登校されてきた先輩方を尊敬します。実習と気候に慣れるために気力と気合で乗り切ろうと思います。先生方、先輩にはご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。



研究室にて

# 歯学部学生の様子

歯学科３年　清　水　香　奈

私は約２年前にも「入学者のことば」でこの歯学部ニュースを執筆させていただきました。当時は新型コロナウイルスによる影響が一番大きな時期であったため、同級生に会える機会もほとんどなく、自分自身が大学生になったという実感があまりありませんでした。しかし、約２年の月日を経てやっとすべての科目が対面授業となり、「普通に大学に通えること」のありがたみを日々感じつつ、楽しく充実したキャンパスライフを送れています。

さて、私は３年生となり今まで様々な実習を行ってきました。中でも特に印象深いのが、３年生前期に行った解剖実習です。私は入学当初から、限られた人しか経験することのできない非常に貴重な経験である解剖実習を楽しみにしていました。実際に人間の体の中の構造を目にすることができるということに興味津々でした。しかし、一番最初の実習でご献体と向き合った瞬間、何よりもまず初めに感じたのは「恐怖」でした。私は幼少期、親戚のお葬式などに参列した際も「亡くなった人の姿」を見ることが怖く、目を背けてまともにお参りができないほどでした。そんな私が急にご献体を目の前にして、このような感情を抱くことも無理はありませんでした。しかし、恐怖は最初だけであり、徐々に解剖させていただくというご遺体に対する感謝や、もっと学びたいという興味や意欲の方が大きくなっていきました。辛い思いもたくさんしましたが、班員とともに解剖実習を乗り越えることができました。この実習を通して解剖学の知識だけでなく、班員で協力して一つ一つのタスクに取り組むことの大切さなどを学び、人間的にも大きく成長することができました。これは、将来歯科医師を目指す私たちにとって大きな糧となりました。

今までの授業は生化学、生理学などの基礎科目が中心で、全身のメカニズムなどを学んできました。しかし、後期からは歯冠修復学の実習などの、より臨床に近い授業が増え、非常に難しさを感じるとともにいよいよ歯科医師になるのだなと身の引き締まる思いでもあります。慣れないことばかりですが、何事も一朝一夕にできるようにはなりません。めげることなく、日々やりがいを感じながら実習に臨んでいます。長いと思っていた６年間の学生生活も、気づけばもうすぐ折り返し地点です。今後さらに自分に磨きをかけて精進していきます。

解剖実習の班員と

# 歯学部生の今

歯学科４年　芦　原　郁　也

私は2019年度に推薦入試で入学し、それからはや４年が経過しようとしている。これまでの４年間を振り返ると、本当にたくさんの経験をしたと感じる。

まずは入学して、それまでとは大きく変化した環境に慣れるのに必死だった１年生の春が思い浮かぶ。一人暮らしを始め、授業の時間割も全て自分で作成するなど、それまでには全く経験したことのない数々のことをこなすことに大きく不安を抱えていたが、それを解決してくれたのは友人たちの助けである。入学後すぐに友人たちは親切に接してくれた。日々を過ごすうちに絆が深まり、今となっては欠かせない存在である。そんな友人たちと自由な生活を謳歌したことが強く記憶に残っている。

そして２年に上がると、ここで新型コロナウイルスの影響が生活に響き始める。授業は全てオンライン化し、外出の自粛に部活動の停止と学生生活のほとんどを奪われてしまった。毎日を自宅で過ごし、友人と飲み会も開けず鬱々とした日々を送っていた。しかしその中でも授業の内容は基礎系の科目が始まり、徐々に歯学生であることを実感できるようになっていた。そして軽音楽部である私は趣味が楽器の演奏ということもあり、自宅での時間を楽器の練習にあて、自分の時間を充実したものにできた。

３年では基礎系の科目に加えて、いよいよ臨床的な内容が始まりさらに歯学生としての自覚が大きくなった。模型とはいえ、初めて歯を削るという行為にこれから伴う大きな責任を感じたことを記憶している。

そして現在４年では来年に控えたCBTに向け勉強への意識が変わったように思う。毎日の実習や授業への身の入り方がより一層集中しているように感じる。これまでに学習した様々な知識が点と点で繋がる感覚も芽生え始め、自分のこれまでに積み重ねた知識を統合的に使うことへの喜びを感じるようになった。

この先CBTや臨床実習、国試などいよいよ歯学生生活の締めくくりに向かっていくが、自分の描く歯科医師像に近づけるようにこの先も努力を怠らず、日々一歩ずつ成長していきたい。

歯学部同窓会50周年記念式典での様子

# 歯学部学生の様子

歯学科4年　小　杉　沙　綺

歯学部に入学してから3年が経った。気がつけば学年は4年に上がり、歯学部での学生生活も折り返しに突入した。それに伴い、学習内容も基礎的なものから臨床に近いものとなり、さらに座学の講義よりも実習の時間が多くなった。実習では知識に加えて技術的なスキルの獲得も求められるので、ただ教科書やレジュメをみて勉強すればよかった今までの学生生活とのギャップを感じ、悪戦苦闘の日々である。

さて、4年後期の時間割には週5日中4日で実習が組み込まれている。毎回、実習の前には予習が必須である。予習では、ただ実習書を読むだけでなく、先生方が用意してくださった動画を繰り返し見て、その日の実習では何をどのようにやるのか、この治療・技工操作では何がポイントなのかなどを把握してから臨む。実習書や動画をみて不明点や疑問点があるときや手技のイメージが持てなかったときは、友人同士で事前に相談し合い、なるべく理解を深めたうえで実習に臨もうとしている。全ての実習に対してこのように準備をして臨むのは大変だが、同級生が自分よりも念入りに予習・準備している姿勢に感化され、頑張ることができている。

しかし、自分なりにしっかり準備して臨んでも、実際は上手くいかないことばかりである。特に私は支台歯形成やう蝕の治療など口腔内での切削操作が苦手である。ファントムにつけて口腔内で形成し、いざファントムから模型を外して口腔外で見てみたら、自分の思い描いていた理想の形態とは程遠いものができてしまっているなんてことも多い。そんな「失敗作」の人工歯が私の技工箱には沢山入っている。しかしこれはゴミではなく、自分のステップアップのためには必要なものであると考えている。なぜなら、形成した歯を先生方に見せると、自分では気づくことのできない癖を気づかせてくださり、同じ失敗を繰り返さないためにはどうすれば良いかアドバイスをくださるからだ。おかげで、支台歯形成・TEC製作・印象操作・模型製作など複数回やってきた手技は1年前と比べて、少しは上達したな、失敗する回数が減ったなと感じることも増えてきた。やらなければならないこと、できるようにならなければならないことが多く、大変なことも多い実習だが、これからも友人同士で相談し励まし合ったり、また先生方のご指導も頂きながら、よい歯科医師に必要なスキルを獲得するために日々精進していきたい。

また、4年生の直近の目標としては来年夏のCBTやOSCEである。まだまだ先のことと思っていた臨床実習がもう1年後に迫ってきている。合格にむけて、同級生と切磋琢磨しながら努力していきたい。

# 歯学部生の様子

歯学科5年　小　泉　瑠　果

こんにちは！歯学部歯学科5年生の小泉瑠果です。今回で歯学部ニュースを執筆させていただくのは2回目となりますが、前回歯学部ニュースを執筆させていただいた時（歯学科2年生次）は、歯について全くといってよいほど無知でありました。しかし、時が過ぎるのは早いもので、あっという間に5年生となり、まだまだ未熟ではありますが、緑衣を着て臨床実習に精一杯取り組んでいます。「歯学部生の様子」ということで、私が5年生次に印象に残っていること・精一杯取り組んでいることについて2点書かせていただきたいと思います。

1点目は部活動です。私は弓道部に入部してから5年目になります。今年度の8月、3年ぶりにデンタル弓道部門が行われました。コロナ禍ということでオンラインでの大会開催となりましたが、様々な大学の方々との弓道を通しての交流を久しぶりに行うことができました。また、団体戦総合優勝を獲得することができ、忘れられない思い出の1ページとなりました。

2点目は臨床実習です。5年生の7月末にCBT、9月末にOSCEを無事に終え、10月中旬より本格的に臨床実習が始まりました。まだ臨床実習を振り返られるほどの余裕もなく診療のたびに自分の未熟さ・不甲斐なさ・歯痒さを痛感させられます。臨床実習が始まって2か月間このようなことばかりですが、臨床に携わる歯科医師として大きな一歩目を踏み出すために、できるだけ積極的に多くの症例を経験していこうと思います。また、臨床実習を通して歯科医師としての基礎を形成することはもちろん、社会人、医療人としての第一歩を踏み出し、歯科医師としてのprofessionalismを獲得できるように努めていきます。そして、臨床実習にご協力下さる患者さんはもちろん、熱心に指導をして下さる先生方、診療準備や診療器具の場所など分からないことを丁寧に教えて下さる歯科衛生士の方々、清掃業者の方々など多くの関係者によって支えられていることを十分肝に銘じ、感謝を忘れずに臨床実習を駆け抜けていこうと思います。

登院式で　友人との1枚　撮影時マスクを外しました

# 歯学部学生の様子

歯学科５年　大　出　怜　子

新潟へやってきて早４年、私の地元である北海道に比べて雪は少ないものの、想像以上の雨の日の多さに驚きはありましたが、そんな新潟での生活にもすっかり慣れてきました。今回このような貴重な機会を頂きましたので、５年生の生活を振り返ってみたいと思います。

５年前期のカリキュラムは４年生までの講義や実習とは異なり、今私たちが取り組んでいる臨床実習を意識したものとなっています。中でも総合模型実習と臨床予備実習（ポリクリ）が主要な科目でした。

総合模型実習は、様々な疾患が設定されている上下顎の模型に対して問題点を見つけ出し、治療計画を立て、治療していくという実習です。治療方法の選択、治療順序、治療にかかる期間なども考慮しなくてはいけません。各々計画が異なるので、隣席の友人と違う処置を行うことも多く、とても不安になりました。しかし、実習で大切なことは治療方法や順序が正しかったかのではなく、どうしてその治療を選んだのかという根拠の検討を行うことでした。この総合模型実習を通して、同じ疾患に対しても異なるアプローチがあり、患者さんに合わせた治療を考える力を養うことができました。

ポリクリでは、各診療科を少人数のグループで回りました。これまで模型に対して行っていた実習を実際に学生同士で行うことで、緊張により手が震えたり、痛みを感じるなど初めて分かることがありました。ポリクリで気付いた痛みや歯科材料の味を今後患者さんに対しての説明と気配りに活かしたいと思います。

CBTやOSCEを乗り越え、ついに10月からは臨床実習が始まっています。先生からのご指導のもと、患者さんに治療をしています。このように実際に学生が治療に携わることのできる臨床実習は、全国に29ある歯学部の中でも数少ないと聞き、そのような貴重な経験をさせて頂けるというのは幸せなことだと思っています。新潟大学医歯学総合病院において担当医の一人として自覚と責任感を持ち、学びのある１年にしたいです。そして、新潟大学での患者さんとの出会いを通じて、技術だけでなく信頼を得られる歯科医師になりたいです。

最後になりますが、臨床実習に協力してくださっている患者様、技術も知識もまだまだ未熟で力不足な私を温かく、時に厳しく指導してくださる先生方、話を聞いてくれるクラスの愉快な仲間たち、そして常に私を支えてくれている両親へこの場を借りて。いつもありがとうございます。

登院式にて54期のみんなと
撮影時マスクを外しました

# 歯学部一年生の様子

口腔生命福祉学科１年　丸　山　さくら

歯学部学生の様子というテーマで、私達口腔生命福祉学科１年生の学校生活を紹介させていただきます。

１年生のうちは基本的に教養科目を履修しますが、前期には旭町キャンパスで早期臨床実習や歯学スタディスキルズといった、歯学に関する授業もありました。入学前にカリキュラムをみて、１年生のうちから実習をすることができることに期待や不安を抱えていました。ですが、いざ入学してみると、講義形式での診療科の紹介。正直病院内での実習ができないと聞いて残念ではありましたが、病院内はひっ迫した状態であることは理解していましたし、まだ医療従事者になるという心構えや知識が不十分な学生をそのような環境に送り込むことのリスクを鑑みると、このような判断も仕方ないなと思いました。そのような中で、私たちのために講義の準備をしてくださった各診療科の方々には感謝してもしきれません。次年度以降の病院内実習が一層楽しみになりました。また、授業内ではグループに分かれて専門診療科の必要性について、オンラインで議論し考察しました。自主調査を踏まえてグループで議論し、再調査を重ねていく作業は大変ではありましたが、回を重ねるにつれ自分たちの構想が形になっていくのが楽しかったです。最終的に発表の形に仕上げられたのはグループの皆さんのおかげですし、ほかのグループの発表を聞く中で、説明の構成やパワーポイントの作り方など、考え方はもちろん、それ以外の部分でも学ぶ点が多くあり、今後の自分の学習生活に役立てていこうと刺激をもらいました。

後期からは対面の授業も増え、前期よりも友人と顔を合わせる機会が多くなりました。そうしたことを踏まえ、徐々に交友関係も広がり、本来の大学生活が戻ってきたように感じます。同じ講義を取っている人同士で意見を交わしたり、教え合ったりしていて、協調性も見られます。次年度からの学習は本格的に歯学に関するものになると思いますし、PBLも始まってきます。より一層の協調や助け合いが求められると思うので、良い学びができるよう頑張っていこうと意気込んでいます。

対面授業と非対面授業が混在しているからこそ融通が利かない部分もあり、大変な部分もありますが、入学してから現在まで、ほかの世代では経験できないことをやらせてもらっていると感じることが多かったです。常に新鮮な気持ちを味わうことができています。それは今の状況だからというのもそうですが、今後はもっと新鮮な気持ちで学習することができるのではないかと期待しています。初心を忘れず、主体性をもって学んでいきたいと思います。さらに今後は対面授業が主になってくるかと思います。歯学部生との出会いに感謝し、交流を深め、充実した大学生活を送ることができるよう、楽しいこともつらいことも共有して、日々楽しんで生活していきたいと思います。

# 歯学部学生の様子

口腔生命福祉学科２年　山　崎　陽　菜

ついこの間入学したばかりと思っていましたが、２年生も終わりが近づいてきていることに、時の流れの速さに驚きを感じつつ、毎日が充実していることを実感します。２年生になり変わったことは対面授業がほとんどを占め、PBLや校内実習が始まったことです。まずPBLが始まりました。私はグループ活動の時に自分の意見を発言したり、司会としてみんなの意見をまとめたりすることがあまり得意ではなかったので、始めはとても不安に感じていました。しかし、PBLを行ってみると、グループのみんなが意見をだし、とても発言しやすい雰囲気のなか行うことができました。１年生の時はZoomがほとんどで関わりがあまりなかった子達ともPBLを通して、仲良くなれとても良かったです。

後期からは校内実習が始まりました。入学してすぐに買ったユニフォームを初めて着て、スケーリング実習を行ったときは自分が歯科衛生士になるための勉強をしていることを改めて実感しました。実際に歯科医院で自分がされていた処置や見たことがあることを行うことは、わくわくします。デモの際に先生方が説明してくれた操作方法やコツなどから動かし方をイメージしている時はできそうな気がしていても、やってみると思っていたよりも難しいことが多いです。また、模型を使って行うのと友達と相互で実習を行うのでは難しさが全然違うと感じました。相互実習では、ひとりひとり歯列の形や口の大きさも違うため、見え方や感覚も異なりとても難しいです。また、痛みを感じる部分や力の加減が分からないため、鋭利な器具を使うときなどは不安に感じることが多いです。術者や補助者として実習を行っている際は、先生方がひとりひとりみて操作方法やコツを教えてくれます。高校までは、授業中に分からないことがあってもその場で聞くことは難しいと感じていました。しかし今は、手を置く位置や器具の向きなど分からないことがあっても、とても聞きやすい環境で、分からないことがあったまま実習が終わることがほとんどなくなりました。先生方は、うまくできるとほめてくれ、できていないところは指摘してくれるため、もっと頑張ろうという気持ちになります。入学前は、口腔生命福祉学科は他の学科よりも人数が少ないことに疑問に思っていました。しかし、20人という人数の学科だからこそ、実習中に先生が個人個人を見てくれる時間が長くなりとてもよかったなと思いました。また、少ない人数の学科だからこそ同じ学科の子たちみんなと仲良くなりやすく、いろんな子と話すことができ楽しい学校生活を送れていると感じています。

実習が始まり、歯科衛生士になるということに実感が湧きつつも、まだまだ不安を感じることやうまくできないことが多くあり、３年生や４年生になり、病院実習で実際の患者さんに行う自信はありません。ですが、たくさん練習し、友達と教え合いながら頑張りたいなと思っています。

# 歯学部学生の様子

口腔生命福祉学科３年　小　池　萌　子

歯学部学生の様子というテーマのもと、恐縮ですが歯学部口腔生命福祉学科での私の学生生活について書かせていただきます。

口腔生命福祉学科の後期の学習では、臨床実習IIの授業の一環として病院実習があります。今までは基礎実習や相互実習で、マネキンやクラスの友人を相手に実習を行ってきましたが、病院実習では患者さんを相手に実習を行います。実習が始まる前は、実際に診療を見学することで学びをより一層深めることができるという期待と、患者さんの前で失敗できないという思いから緊張や不安がありました。しかし、口腔生命の４年生の先輩や病院で働く歯科衛生士や歯科医師の方々からたくさん助けていただきながら、見学に加えてバキューム操作や器具・器材の準備などの歯科衛生士の業務を実際に行い、充実した実習をさせていただいております。バキューム操作は相互実習で練習してきましたが、患者さんによって注意点が増えたり、工夫が必要であったりと、今までの練習だけでは不十分なこともあるため、試行錯誤しながら行っています。また、診療に使用する器具や器材は多くの種類があり、それぞれの用途や置き場所などを全て覚えることに苦戦しています。歯科衛生士の業務は大変だと感じることも多々ありますが、実際に患者さんとお会いし、診療の様子を見学、補助させていただくことは貴重な機会であり、とても勉強になります。

歯科衛生士の仕事は、歯科保健指導や診療補助ですが、声かけを行ったり、笑顔で接したりとコミュニケーションによって患者さんを安心させることも大切な業務の１つであると考えます。知識や技術の面だけでなく、コミュニケーションの面でも病院の歯科衛生士の方々から日々学んでいます。患者さんに対して常に笑顔で優しく対応している歯科衛生士さんは患者さんだけでなく周りの人を安心させ、暖かい空気感をつくってくれる力があると思いました。病院実習を通して、歯科衛生士の業務に必要な知識や技術を身につけつつ、患者さんとの信頼関係の築き方なども学んでいきたいと考えています。

また、３年生からは福祉の学習もより本格的に始まりました。講義やPBLを通して、児童虐待や生活困窮者などの社会における多様な問題や高齢者や障がい者を支える支援などについて学んでいます。誰もがこの社会で自分らしい暮らしをすることができるように、日本には様々な制度や支援サービスが充実しています。そのような制度や支援の仕組み、背景を学ぶことに面白さを感じています。福祉の授業では、ときには深刻な問題や現実を目の当たりにすることもあり心を痛めますが、それらの問題から目を背けずに、しっかりと向き合い、一人でも多くの人の幸せのために何ができるか考えていきたいと思います。

４年生からは病院実習の回数が増え、さらに１カ月間の社会福祉実習なども行います。残り約１年の学生生活の中で、クラスの仲間と共に多くのことを学び、歯科衛生士と社会福祉士のどちらでも活躍できるようなスキルを身につけたいと思います。

●部●活●動●紹●介●

# 歯学部軟式野球部

歯学科4年　高　津　彰　史

こんにちは！新潟大学歯学部軟式野球部です。私たち野球部の活動や魅力を少しでも知っていただけたら嬉しいです。

私たち歯学部軟式野球部は、毎週月曜日と金曜日に、新潟大学附属新潟中学校のグラウンドで練習をしています。春と秋は県内のリーグ戦があるので、リーグ戦を勝ち抜き、その上の全国大会や北陸大会に駒を進めることができるように日々頑張っています。部員は野球経験者から大学で野球を始める人まで様々ですが、練習の成果もあり、今年度は昨年度以上の結果となる地区3位という結果を残すことができました。私としては、結果もそうですが、大学から野球を始めた仲間が目に見えて上達し、一緒に野球をして、楽しさを共有できたりするのが本当に嬉しいです。

新潟県歯科医師連盟野球部様、長野県歯科医師連盟野球部様との交流戦の時の写真

OB戦終了後の集合写真

リーグ戦の写真

リーグ戦とは別に、新潟県歯科医師連盟野球部の先生方や、他県の歯科医師チームとの試合、OB戦、医学部軟式野球部との練習試合なども行っています。昨年度までは新型コロナウイルス感染症の影響でかなり活動が制限されていましたが、今年度からはOB戦や歯科医師チームとの試合も再開し、試合数も例年より格段に増やすことができました。来年度もリーグ戦で良い結果を残せるように、このような試合機会も増やしていければと考えています。

今年度は活動の制限がある中、徐々に規模を広げながら元の活動を取り戻していけた年になったと思います。来年度も今年度以上に部員みんなで頑張っていきます！応援よろしくお願いします！

# 江戸千家茶道部

歯学科2年　渋　澤　真　舟

こんにちは。江戸千家茶道部です。現在、私達は歯学部生６名、医学部生21名の総勢27名で活動しています。他の部活動に比べると部員数は比較的少ないですが、その分部員同士の絆が強く、学部や学年の垣根を越えて交流している様子が常に見られます。

茶道というと伝統的で格式高いというような印象があり、やや堅苦しく感じる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、江戸千家茶道部ではほとんどの部員が大学から茶道を始めており、お互いに分からない部分は教え合いながら和気あいあいと活動をしています。

昨年は新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行した影響で茶道部の大切な行事であるお茶会に一度も参加することが叶わず、とても歯痒い思いをしました。しかし、徐々にではありますが感染拡大も落ち着き始め、今年は12月に開催される秋のお茶会に参加することが決定いたしました。新潟大学には五十嵐キャンパスに３つ、旭町キャンパスに１つ茶道部があり、全て流派が異なります。お茶会ではこれらの茶道部や他大学の茶道部が一堂に会してお点前を披露するのですが、一口に茶道と言っても流派によりその形式は様々であり、参加する度に非常に多くの新しい学びがあるように感じます。

日頃の部活では先生のご指導の元、茶道の作法を学んでいます。作法を覚えてこなせるようになるまではなかなか大変ではありますが、はじめて自分の力でお点前ができた瞬間の達成感はひとしおです。私はお点前がようやっとできるようになったとき、それまでは別々に捉えていた所作一つひとつが実は全て繋がっており、一切の無駄がないということに気付かされました。そしてそれらは日常生活にも通ずるものがあると感じ、茶道の奥深さを改めて知ることができたように思います。

また、季節により変わるお点前を通じて古の人々の風流心に触れ、現代日本では忘れ去られがちな日本文化の持つ趣深さを学ぶこともできます。これは茶道部ならではの大きな魅力の一つといえるでしょう。目まぐるしい日々の中で茶道部の活動に参加すると、お抹茶やお菓子を楽しめるだけでなく、日本の美しい四季の移ろいも感じられ、不思議と心が安らぐような気がします。茶道部に入部せずとも、穏やかなひとときを過ごしたい際にはどなたでもぜひお気軽に足を運んでいただければと思います。

最後になりますが、江戸千家茶道部を支えてくださっている全ての方々に心より感謝いたします。部員一同引き続き精進して参る所存です。今後とも温かく見守っていただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

撮影時マスクを外しました

# 留学に行こう

歯科麻酔学分野　岸　本　直　隆

こんにちは。歯科麻酔学分野の岸本直隆です。私は2022年 3 月末より、カナダ・モントリオールにあるMcGill University, Craniofacial Tissue Engineering and Stem Cells Laboratoryに留学中です。今回の留学は科研費・国際共同研究強化（A）の採択を受けており、脱分化脂肪細胞由来cell extractの末梢神経再生メカニズムの解明をテーマに研究をしております。この種目は基盤研究/若手研究（基課題）に採択された45歳以下の研究者が、海外でその基課題を発展させることを目的に設けられており、渡航費、滞在費、研究費に加え、留学中の代替要員確保のための経費としても使用可能です。海外留学を目指す若手研究者にとって、非常に大きな支援となるため、留学を検討されている方には積極的に申請することをお勧めします。

次に所属する研究室について紹介します。ボスであるDr. Simon Tranは、元々はアメリカ歯周病専門医として臨床に従事していましたが、現在は幹細胞を用いた再生医療の研究者として、多くの大学院生を指導しています。特に唾液腺再生の権威であり、放射線照射やシェーグレン症候群によるドライマウスを対象として、障害唾液腺の再生効果に関する多くの論文を出版しています。研究業績が素晴らしいのはもちろんですが、個人的には人柄の良さがDr. Tranの一番の魅力だと思っています。現在、私は同研究室へ 2 回目の留学（前回は2017～18年）ですが、今回の留学に際し事前に連絡したときも、「この研究室はあなたにとって 2 番目の家だから、いつでも歓迎します」と温かく受け入れてくれました。エピソードはたくさんあり、ここでは書ききれませんが、Dr. Tranほどのジェントルマンにはこれまで出会ったことがありません。唾液腺だけでなく、骨や軟骨などの再生医療研究も行っていますので、ボスの人柄も含め、歯科再生医療に興味がある方にはとても魅力的な研究室だと思います。モントリオールがあるケベック州はフランス語が公用語ですが、McGill Universityは英語教育ですので、フランス語が話せなくても大丈夫です（私も話せません！）。

最後になりましたが、今回の留学に際し、快く送り出して頂いた歯科麻酔学分野の瀬尾憲司 教授をはじめ、医局員の皆さまに御礼申し上げます。またいつも支えてくれる妻、英語とフランス語が飛び交うデイケアでも楽しいと言ってくれる逞しい 2 人の息子にも感謝の思いを伝えつつ、本稿を終えたいと思います。ありがとうございました。

Simon Tran教授（右）、研究の打合わせのためMcGill Universityを訪問した瀬尾 憲司 教授（中央）、筆者（左）

# 研究留学記@UCSD②

歯周診断・再建学分野　高　橋　直　紀

【はじめに】

2022年３月より米国カリフォルニア州立大学サンディエゴ校（University of California、San Diego; UCSD）への留学の機会を得ましたのでその報告をします。題名に②が付いているのは、10年越しで同じ研究室へ２回目の留学となったためです。留学先の紹介は前回の留学報告をご参照下さい（https://www.dent.niigata-u.ac.jp/ShigakubuNews/122/）。２回の留学経験を比較しての雑感になりますが、今後留学を検討している先生方の参考になれば幸いです。

【スムーズな留学セットアップ！】

情報通信技術の進歩に加え新型コロナウィルス感染予防対策も相まり、渡米前から渡米直後にかけての様々なセットアップは10年前とは比較にならない程スムーズでした。アパートの選定～契約については、オンラインでのバーチャルツアーを行い、オンライン署名によって渡米前に契約まで済ませることができました。10年前は現地到着後に何軒も候補物件を回り、慣れない英語で家賃交渉を行い、分厚い契約書に１枚ずつ目を通しながら署名をしたのものでした。仕事のセットアップにおいても、オリエンテーション等々全てがe-learningで大変効率的でした。かつては講義室を迷いながら探したり、ダブルブッキングで時間調整が難しかったり、英語で指されないかハラハラしていたものです。語学習得の一面もある研究留学ですので、対面での英会話の機会が減ったのは残念な部分もあるかもしれませんが、少なくとも留学のセットアップにおける語学力のハードルは低くなり、留学しやすい環境になったと感じました。

【異常な物価高と歴史的円安の影響】

日本においても身の回りの様々な物の値上げのニュースが後を絶たないですが、米国の物価の高さには驚きました。留学先であるサンディエゴの家賃相場は10年前の２倍以上に跳ね上がっており（建物は10年分古くなっているにも関わらず）、食料品もガソリン代も肌感覚で日本の２倍近くと感じました。それに加えて歴史的な円安が追い打ちをかけ、ラーメン１杯が日本円で3000円越え（税＋チップ含む）と、日本では考えられないくらいの高級品でした。大学内のフードコートでのランチも一食1500-2000円もかかるため、ほぼ毎日自作のサンドイッチを持参して倹約を心がけました。今後の物価高と円安の行方は分かりません

10年ぶりに再会した元同僚たち

が、日本国内の留学支援団体は現在の留学生の経済状況を改善すべく聞き取り調査を行っているようですし、特定の団体はドル建てで留学費用を支給することで為替変動による経済面での留学生の負担が増えないように配慮しているそうです。今後は更に改善されていくものと思われますので、留学をぜひ前向きに検討してほしいです。

【終わりに】

最後になりますが、このような貴重な機会を与えて下さいました歯周診断・再建学分野　多部田康一教授には深く感謝しております。また留学にあたり、研究や外来、教育における様々な業務を代理および引継ぎで対応して下さった先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

# ボストン／ハーバード大学　留学報告

歯周診断・再建学分野　中　島　麻由佳

2019年４月から2022年３月まで米国ボストン、Harvard University School of Engineering And Applied Sciencesへ留学する機会を頂きました。同じく留学の機会を得た夫と、当時３歳になったばかりの娘と共に家族３人で渡米致しました。渡米当時、まさか滞在中にCOVID-19のパンデミックに見舞われるとは思ってもいませんでしたが、不自由なことが多い中でも沢山の素晴らしい経験を積むことができましたので、この場をお借りしてご報告致します。

お世話になったSamir Mitragotri教授が主宰する研究室は、ドラッグデリバリーシステム：DDS（目的の患部へより安全で効率的に薬を届ける技術）に関する研究を行っており、特に経皮吸収や細胞をdrug carrierとして用いるDDSを得意としています。扱っている素材やアイディアはどれも革新的でユニークであり、またこの研究室で生まれた数々の技術が実際に臨床応用されているところに最大の魅力があるように思います。

私は留学するまで歯周病に関するメカニズム解明を中心とした研究を行っており、DDS研究の経験はありませんでした。留学を行うにあたり、より患者さんに近い研究をしたい、思い切って新しい領域へチャレンジしたいとの思いから、歯科では依然として開拓途上であるDDS領域を選択し、Mitragotri Labにアプライをしたのが始まりでした。経験のない分野、しかも工学系のザ・基礎研究室、言葉も不自由といった状況の中で、始めの頃はラボミーティングの内容について行くのもやっとの状態でした。しかし、DDS研究の面白さが分かってくると共に、ラボメンバーのサポートのもとプロジェクトが軌道に乗り始めると、みるみるとDDS研究の魅力にのめり込んで行きました。やりたいことが溢れてきて「時間が足りない！」と、帰国する前日までピペットを握って実験した程でした。私が行った研究は歯周病に対する塗布薬の開発や口腔ケア用品のエンジニアリングなど、Mitragotri先生にとっては馴染

ラボメンバー集合写真（サマーパーティー、Mitragotri教授のご自宅にて）

みのない分野だったにも関わらず、興味の赴くままにのびのびと研究活動をさせて頂いたことに感謝の気持ちしかありません。

留学中はアメリカならではのゆったりとした時間の中で、家族の時間を沢山作れたことも良い思い出です。特に夏は、短い良い季節を濃い密度で楽しむのがボストン流で、多くのファミリー向けのイベントがあり、バーベキューや野外コンサート、プールサイドでのムービーナイトなど楽しい思い出は尽きません。アメリカ滞在中はとにかく車で移動することが多く、ボストンからナイアガラの滝まで、どこまでも真っ直ぐなハイウェイを８時間かけて運転して行ったことなど、留学しなければ経験できなかったことが沢山ありました。

末筆ではございますが、このような貴重な機会を与えてくださった多部田康一教授、患者様の引き継ぎ等サポートを頂いた歯周診断・再建学分野の皆様に深く感謝致します。

アメリカ独立記念日の野外コンサート
（Hatch Shellにて）

# 留学へ行こう

微歯周診断・再建学分野
微生物感染症学分野　田　村　　光

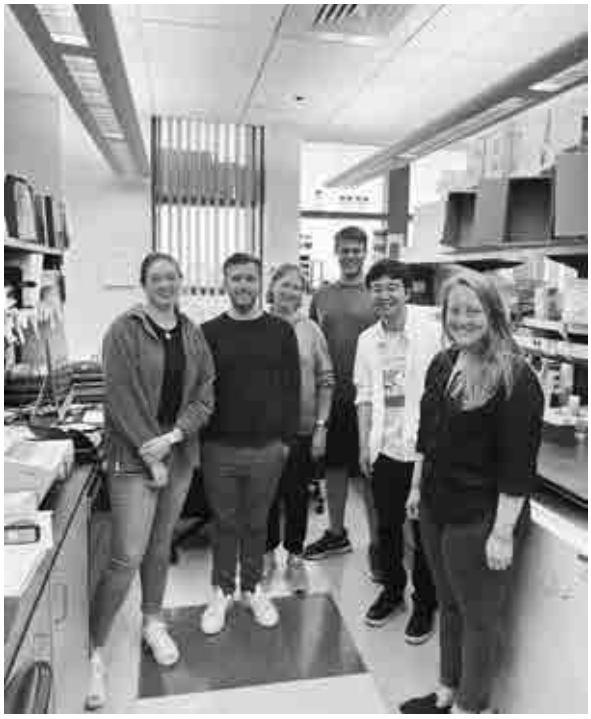
私は、2022年４月より日本学術振興会の海外特別研究員として、マサチューセッツ州ボストンにあるタフツ大学医学部免疫学分野Alexander Poltorak研究室に留学をしています。ボストンはアメリカ東海岸の北部に位置し、都市圏にはハーバード大学、MIT、ボストン大学等の有名大学を含む100以上の大学が集まる学術都市として知られています。また、大航海時代の情緒を残すレンガ造りの街並みと、近代的なビル群、自然豊かな公園が違和感なく調和し、所謂‘映えスポット’を数多く見つけることができます。

Poltorak研究室は、免疫学の中でも自然免疫学を専門とし、特に炎症や細胞死に関する基礎医学を遺伝子レベルで研究しています。私は現在、LPS毒素に起因した急性炎症における‘致死性’と‘発熱’に関与する新規遺伝子の特定を目指しており、実験には日本の九州にルーツを持つLPS耐性マウスを用いています。異国の地で出会ったこともあり親近感を覚えたものの、ケージを簡単に飛び越える驚異的な跳躍力と目で追うのがやっとな程の俊敏性を兼ね備えたマウスのため、扱いに悪戦苦闘しながら日々研究に励んでいます。将来的には、ここで得た免疫学研究の知識や技術を歯周病病態の解明や新たな治療法開発の研究に活かしたいと考えています。

ラボメンバーは同年代のアメリカ人がほとんどで、渡米当初は会話のスピードに追い付けず、話題にも苦慮していました。しかし、少年時代にゲームボーイのポケモンを遊んでいたことや野球をしていたこと等共通の思い出を見つけたり、私が挨拶や笑顔、話の聞き方など日本と異なる習慣について理解を深める中で、徐々に馴染むことができています。語学力不足の私を優しく受け入れてくれたラボメンバーに感謝するとともに、周囲に甘えすぎず英語やコミュニケーションの能力を今後も向上させていきたいです。

この度‘留学へ行こう’というテーマで執筆の依頼をいただきましたので、この文章を読んで少しでも海外留学に興味が湧く方がいましたら幸いです。また、留学をしない理由は後からでも簡単に見つけられ、止める決断もできると思います。少しでも留学に興味を持っている方は、留学できる可能性のある道を探して、進んでいくことをおすすめします。

最後に、留学という貴重な機会を得ることできたのは、指導教員の前川先生をはじめ、土門先生、寺尾教授、Alexander教授をご紹介くださった多部田教授や前田学部長およびこれまでお世話になった先生方のご指導や支えのおかげです。改めて深く感謝申し上げます。



研究室にて、ラボメンバーと

# 早期臨床実習を終えて

歯学科１年　髙　野　日　菜

今年度の早期臨床実習も新型コロナウイルスの流行のため、実際に医療現場を見学することはできず、各診療科の先生方による講義と、「専門診療科の必要性を考察する」というテーマでのグループワークを行いました。

各診療科の先生方による講義では、各診療科の役割や治療内容などについて紹介していただきました。実際に治療を行っている様子や、治療後の変化を動画や画像を用いて説明していただき、実際の治療の様子を見ることができる貴重な機会でした。どの診療科の講義も初めて知ることばかりで興味深かったですが、具体的にどのようなことをするのか分からなかった診療科や聞いたことのない診療科の講義は特に興味深かったです。講義を通して、今後たくさんのことを身に着ける必要があると知り、学びきれるのか不安に感じましたが、同時に、自分が理想とする歯科医師になれるよう頑張ろうと気持ちを引き締めることができました。

グループワークでは、１グループ７～８人に分かれて専門診療科の必要性について討論し、そこで出た結論について学年で全体発表を行いました。私たちのグループでは、各専門診療科について調べ、その診療科が必要な理由を考察しました。また、専門診療科があることによるメリットとデメリットを歯科医師目線と患者さん目線で考察し、専門診療科は必要であるという結論を出しました。話し合いでは、様々な考えを持ったメンバーと意見交換をすることで、自分の考えを深めることができました。全体発表では、正反対の主張をしているグループがあったり、同じ主張でもその主張に持っていくまでの考え方が異なるグループがあったりし、様々な意見を聞くことができ、とても勉強になりました。

早期臨床実習で歯科について学び、考えることで、知識や考えが深まるだけでなく、今後の学習へのモチベーションが高まったように感じます。この授業を通して学んだことや感じたことを忘れず、今後の学習に励みたいと思います。

口腔生命福祉学科２年　富　高　　愛

今年度の早期臨床実習は、今後学習する知識・技術がどのように保健・医療・福祉の現場で生かされているか見学を通して学習しました。新型コロナウイルス感染拡大防止に務める中、見学をさせて頂いた４施設には心より感謝しております。

特別養護老人ホームばんだい桜園では、入居者ひとりひとりの生活スタイルを把握しニーズに応じた対応や提案をする社会福祉士の姿が伺えました。それは入居者に対してだけではなくご家族へも同じです。プライベート空間がありながらも人との交流があるこの施設は温かさが感じられ、施設での生活をより快適で穏やかなものにしていました。

医療センターでの歯科衛生士の業務は診療補助だけではありませんでした。急患もあることからその場面毎に考え判断しなければなりません。何の情報が必要か、何を準備しなければならないのか、さらにその優先順位を考え行動する病院歯科での歯科衛生士の動きはとても難しそうに感じました。

保健所では、1.6歳児健診と３歳児健診を見学しその両者では雰囲気が全く異なっていました。パターン化した対応ではなく、ご家族に応じた相談しやすい環境作りをしていました。病気や発達障害の早期発見はもちろん、虐待のリスクを鑑みる場でもあることを学び、時代の流れに応じて健診の在り方も変わっていることに気づきました。

児童相談所では、歳も背景も課題も違う子どもたちが集団生活をしている部屋を実際に訪れまし

た。大人との関わり方を一緒に生活していく中で教えることは、その子自身の成長だけでなく親の成長にも繋がることを学びました。

施設見学のほかにも高齢者疑似体験、患者面接法、バイタルサイン測定など、今後の基礎実習・臨床実習を効果的かつ安全に実施するための基礎的知識・技術を身につけました。この早期臨床実習を通し、これからの学習に対する意識を高めることができました。後期から始まる基礎実習・臨床実習に意義を持って取り組んでいきたいと思います。

# ポリクリを終えて

歯学科５年　近　藤　裕次郎

１年次につづき再び歯学ニュースに寄稿する機会をいただき、ありがとうございます。

以前の寄稿では、早期臨床実習の際に衝撃を受けた膨大な知識と高いコミュニケーション能力を備えた６年生の姿と術者立場からの歯科医療について書かせていただきました。それから４年が経過し、ポリクリを終えて私は臨床実習生となりましたが、あの頃憧れた先輩方の姿にはまだ程遠く一層精進しなければならないと感じています。

今年度のポリクリにおいても先生方のご尽力により感染対策をしっかり行った上で相互実習を行うことができ、学生にとって大変有意義なものとなりました。実際の口腔に触れ、ミラーの見え方も頬粘膜の圧排も模型とは全く異なることを実感し、また患者の立場となって初めて注意すべき不快感にも気付くことができました。特に浸潤麻酔、伝達麻酔のような侵襲的な処置は危険が伴う上、誰もが初めての経験となるため、当日は異様なまでの緊張感に包まれていたことは印象深いです。ただ、長年の実習経験に裏打ちされた先生方の的確な指導のおかげもあり、学年一同何事もなく実習を終えることができました。その他にも数々の貴重な経験をさせていただきましたが、全て周りの方々のご協力なしでは成し得なかったと感じています。この場を借りて感謝を伝えたいと思います。

臨床実習引継ぎ最終日　野球部の先輩方との一枚
撮影時マスクを外しました

最後になりますが、今後もポリクリやこれまでの習得した知識・技術・態度に磨きをかけ、一歩ずつでも胸を張れる歯科医師となれるように励んで参ります。

歯学科５年　中　嶋　優　晶

緑衣を身にまとい廊下を歩く先輩方を見て、「かっこいい！憧れるね！」なんて会話をしていた３年前。それがいつのまにか、自分が緑衣を着る側になっているのですから、時が経つのは早いものです。

実習が始まるまでは、「ポリクリとはなんぞや？」といった気持ちで、５年生になったとはいえ、知識も経験も乏しく、無事乗り越えることはできるのかと不安でいっぱいでした。しかし始まってしまえばそんな心配をしている暇もなく、班の仲間と切磋琢磨しながら、学ぶ日々であったと思います。

ポリクリを終えて、今までの実習と大きく異なると感じたことは、やはり相互実習があることかと思います。これまでファントムに対して行ってきた処置を、友人とはいえ"人"に対して行うのですから、今まで以上に緊張と責任が伴います。しかしこのような経験ができるのは今だけで、今後は友人ではない、患者さんに行なわなくてはなりません。そこで、この貴重な機会を無駄にしないために、私は班のメンバーと「この時はこうするとよいね」「この処置はここに注意だね」などと意見交換をするように心がけていました。実際に自分達が経験することで初めて知ることも多く、大変良い学びになったと確信していますし、これ

が今の臨床実習にも役立っていると強く感じます。

現在臨床実習真っ只中で、自分の不甲斐なさを痛感する毎日です。未だ発展途中ではありますが、夢を叶えるためにも、何事にも感謝を忘れず、目の前の一瞬に全力を注ぎ、少しでも多くのことを吸収していけるよう邁進していきたいと思います。

登院式にて、大切な友人との一枚
撮影時マスクを外しました

# 素顔拝見

予防歯科学分野

竹　原　祥　子

こんにちは、令和３年９月１日より予防歯科分野の准教授を拝命した竹原祥子（たけはらさちこ）と申します。出身は岡山県で、新潟大学教員を拝命する以前は家族と一緒に千葉市に住んでおりました。新潟には単身赴任になります。

これまでの略歴ですが、東京医科歯科大学歯学部を卒業し、学位を取得後、同大学健康推進歯学分野の教員として口臭外来での診療、教育及び研究に携わりました。口臭に関する研究では疫学的研究にとどまらず、唾液タンパク質と口臭との関連について生化学分野の研究を行ってきました。その後、平成29年に東京女子医科大学医学部公衆衛生学講座の助教として着任し、医学部および看護学部の学生教育、研究に携わりました。研究では、電磁波の健康影響について総務省の疫学調査に参加するなど、歯科分野では触れたことがなかった分野の研究に取り組み、実践を通じて疫学研究の基礎を学びなおすことができました。また東京女子医科大学在任中に、豪州政府助成を得てシドニー大学のリサーチフェローとして半年間の留学の機会を頂き、高齢男性対象のコホート調査に参加するなど、貴重な経験を得ました。現在は新潟大学予防歯科学分野の准教授として、大学院生の研究指導、学生教育、予防外来及び口臭外来での診療、WHOコラボレーティングセンター（WHOCC）の情報発信や調査研究を担当させて頂いております。

歯学部卒業してから現在までを振り返ってみると、歯学部学生時代には高野吉郎先生（東京医科歯科大学元教授、新潟大学出身）に解剖学を学び、東京医科歯科大学在任中は安藤雄一先生（国立保健医療科学院、新潟大学出身）がリーダーを務められていた平成23年歯科疾患実態調査解析グループの一員として報告書作成に関わるなど、複数の新潟大学出身の先生にご縁してきました。新潟大学予防歯科学分野の准教授の任務を拝命するにあたり、歴史ある新潟大学歯学部の教員が私で務まるのか不安なことも多くありましたが、教授である小川祐司先生、葭原明弘先生、濃野要先生をはじめ、予防歯科分野の先生方に助けて頂きながら、この一年を乗り切ることができました。新潟大学歯学部の発展に少しでも貢献できるよう、日々邁進していく所存です。どうぞよろしくお願い致します。

❊

Division of Anatomy and Cell Biology of the Hard Tissue

Angela Quispe-Salcedo

## Coming back to the place where everything started

My name is Angela (Angie) Quispe-Salcedo, I am from Peru, and after a long while I am back to Niigata University, this time as Assistant Professor at the Division of Anatomy and Cell Biology of

the Hard Tissue.

I graduated from the Faculty of Dentistry of the National University of San Marcos in Lima, my home city, in 2006; and following a period when I worked as a clinician, I successfully applied for the Japanese Government Scholarships (MEXT) to pursue a PhD degree in Japan. I moved to Niigata in 2010 and began my journey as PhD student at the Division of Anatomy and Cell Biology of the Hard Tissue, under the supervision of Professor Hayato Ohshima. I very much treasure the years I spent during the graduate school: the experience of sharing and learning from my supervisor Dr. Hiroko Ida, who kindly helped me every time, and the feeling of discovering something new, are unforgettable memories that I will keep forever in my heart.

Soon after my graduation in 2014, I moved back to my country and then I relocated to United States of America, where I worked as a Postdoctoral Fellow at the University of Texas at Houston, and later, at the Department of Oral Biology in the College of Dentistry of New York University. I also had the experience to live and work in Switzerland through a short-term fellowship in the Institute for Oral Biology at the University of Zurich. In 2020, at the beginning of the COVID-19 pandemic, Prof. Ohshima and I were granted a Fellowship from the Japanese Society for the Promotion of Science (JSPS) for Foreign Researchers that let me be back to Niigata University to work in the laboratory where I started as a PhD student more than 10 years ago.

Since last March, I became Assistant Professor and started working in the Gross Anatomy Dissection course and my own research project. During all these years, my research field has been always related to the biology of the dental pulp, and its responses following tooth injuries. I consider this is an exciting field that needs to be further investigated.

Although every day is a big challenge (My Japanese is not great!), I am very glad and grateful of being here. I like Niigata city, the food and the feeling of being in a place that I consider my second home. I am looking forward to continuing my career as a researcher and educator, and to gathering more beautiful memories for the future.

❀

**包括歯科補綴学分野**

**兒　玉　匠　平**

令和３年６月から包括歯科補綴学分野の助教を拝命いたしました、兒玉匠平（こだましょうへい）と申します。この度は「素顔拝見」の記事を寄稿させていただく機会を頂きましたので、僭越ながら自己紹介をさせていただければと存じます。

私は新潟大学歯学部の45期の卒業で、卒後は包括歯科補綴学分野の大学院に進学しました。大学院時代は素晴らしい先輩方にも恵まれ、ひたすら補綴臨床に明け暮れる毎日でした。大学院卒業後は小野高裕元教授から紹介していただき、顎口腔インプラント治療部の荒井良明先生の下で１年と２か月という短い期間ではございましたが医員として学ばせて頂く機会を得ました。現在は包括歯科補綴学分野に戻り、ありがたくも助教として働

かせていただいております。インプラントと顎関節について学ぶ機会は私にとって大きなターニングポイントとなり、それまで大学院時代に取り組んできた義歯治療と合わせることで非常に臨床の幅が広がりました。まだまだ駆け出しの身ではありますが、自分の得た知識を更新しながらも医局の後輩たちにいかに広げられるかが今後の課題です。

普段は義歯診療科で診療をする傍ら、学生教育にも従事させていただくようになり１年が経過しました。自分自身の知識を再整理しなければならず教育の難しさを感じた一方で、学生の皆さんの成長を見ることができた時にはとてもやりがいを感じました。今の学生の皆さんを見ていると自分が学生だった頃よりもよほどしっかりしているなと感心させられるばかりです。自分の学生時代を振り返ると本当に怒られていた記憶ばかりが思い出される、いわゆる劣等生でしたのでまさかそんな自分が学生教育だなんて今でも信じられない気持ちです。今の自分があるのも当時お世話になった包括歯科補綴分野の教員の先生方のおかげなのは間違いありません。自分が受けた御恩を学生の皆さんに還元できるように努めるつもりです。

さて、話題を変えまして恥ずかしながらも私の私生活について触れたいと思います。令和４年２月に第１子が産まれまして、生活が子供を中心とするものに様変わりしました。中学・高校の思春期をいわゆるコミュ障な学生として過ごしてきた自分としては父親になる準備が全く整わないまま子育てが始まってしまった次第です。元気で明るい子に育ってくれれば良いのですが、子供に恥じないような父親になれるよう頑張りたいと思います。自分のような不出来な人間についてきてくれている妻にも感謝です。子供ができてからよく写真を撮るようになったのですが、２月に子供が生まれてからの春・夏・秋と四季の変化を感じることができるようになりました。新潟に住んで14年になりますが、こんなに四季がきれいな街だったのかと再認識しております。カメラを教えてくれた村上和裕先生に感謝したいと思います。週末はベビーカーを押しながら万代の街をショッピングするのが日課ですので、見かけたときはお声がけください。

今後も精進してまいりますので何卒よろしくお願い申し上げます。

**包括歯科補綴学分野**

**吉　村　将　悟**

2021年７月１日付で、包括歯科補綴学分野の助教を拝命しました吉村将悟と申します。「素顔拝見」の執筆の機会をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介や近況について少しだけお話しをさせていただきます。

出身は福井県鯖江市で北陸高速道を車で走ると目に入ってくる『〇-〇 SABAE』のハリウッドライクな看板がある眼鏡で有名な町になります。当然のように僕もハードな眼鏡ユーザーです…。大学進学に伴い新潟に移り住んだ当初、眼鏡の町しか知らなかった僕からすると、新潟が凄く近代的な街に思えたのがいい思い出です。

小学校、中学高時代はいたずら好きな性格も相まって両親に色々と“少しだけ”迷惑をかけながらも、スポーツ少年団の頃から続けていたバレーボールに情熱を注いでおりました。チーム自体が北信越大会出場を複数回経験していたことや、中学１年生の時の大会でベストリベロ賞を受賞したこともあり、将来はVリーグの選手（プロのバレーボール選手）になりたいと思っていました。しかし、身体が小さかったことや実力不足の実感もあって次第にその夢は諦めるようになっていきました。夢を諦め、なにしようかなーくらいで楽観的に考えていた頃、母親の勧めで受けた歯科矯正治療で、口の中をデザインしていくという歯科独特の特徴に惹かれ、新潟大学歯学部を目指すことになりました。2010年（46期生）に入学後、順調に進んで、包括歯科補綴学分野の扉を叩いた最も大きな理由の一つは、卒前臨床実習中の咬合採得（義歯）のステップで、今も学生時代も恩師で

ある先生に「君はできるから大丈夫だよ」と言われ、その気になって治療に臨んだものの途中で自分が何をやっているか分からなくなり、結局先生に頼りきってしまったという苦しくも悔しい経験をしたからだろうなと思っています。まだまだ未熟なものの少しだけ臨床への理解も深まり、『包括的な口腔デザイン』に再度惹きつけられ、日々の臨床を苦しくも楽しんでいます。また、助教となり自分が臨床実習で学生に指導する立場になると、人に教えることで見えてくる自身の知識や認識の甘さを痛感し、学生に指導しているつもりが自分も学生に教えてもらっているかもしれないんだなと思うと同時に、指導した学生に着実に力がついていくのをみると教育の楽しさも実感できてきました。

大学院時代から現在まで行っている研究では、小野教授、堀准教授の指導の下、『bitescan®』と呼ばれる耳にかけて咀嚼を計るウェアラブル咀嚼回数計測装置を用いて、若年者における咀嚼行動の基礎的なデータの収集から、肥満と咀嚼回数の関係性の検討を行っていたりとまだまだ明らかにされていない咀嚼行動領域への研究に日々邁進しております。

最後に、未熟者ではございますが新潟大学歯学部の発展のために尽力していく所存です。至らぬ点も多々あるかと思いますが、皆様、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。

❀

**高度医療開発センター先進医療開拓部門**

**都　野　隆　博**

2021年６月１日付で、新潟大学医歯学総合病院の高度医療開発センターの特任助教を拝命いたしました、都野隆博と申します。この度、歯学部ニュース「素顔拝見」を執筆する機会を頂きましたので、簡単に自己紹介をさせて頂きます。

出身は埼玉県白岡町（現：白岡市）という田畑の緑豊かな町で、公務員の両親の間に生まれました。小学生の頃は少年野球をやらせてもらい、またゲームを買ってもらうなど、家の外でも中でもよく遊ぶ子供でした。そんな落ち着きのない子供時代に両親の勧めもあり、書道を習い始めました。初めは正座すらもつらく感じたものの、10年間も続くと“継続は力”となり、高等師範免許の取得まで至りました。当時は有難みを感じることは少なかったのですが、大人になった今、悪筆を晒さないように気を付けることができ、両親にとても感謝してます。高校ではフットサルを行い、生徒会として学園祭を企画するなど、充実したスクールライフを過ごす中で、将来自分はどんな仕事をしたいのだろうと漠然と考えるようになりました。色々な職種を調べていく中でやりがいのある医療職をしたいと思い、歯科医師を目指すようになり、46期生として新潟大学歯学部に入学しました。入学して初めて歯科業界というものに触れていき、また楽しい同期に囲まれながら、無事に歯科医師になることができました。

大学卒業後は歯周診断・再建学分野に入局し、大学院にて歯周医学に関する学位研究を行いつつ、骨再生の研究も行っておりました。多くの国内・国際学会で研究発表させていただき、また臨床では医局の先生方にご指導を頂きながら歯周病認定医を取得することができ、駆け出しの研究者・臨床医として充実したスタートを切ることができました。現在は医歯学総合病院の高度医療開発センター先進医療開拓部門に所属し、歯科再生医療の取り組みに参加させて頂いています。これまで新潟大学医歯学総合病院で培われてきた再生医療技術の発展および社会普及を目標に、一人の歯科医師として本取り組みに参画できることを心より嬉しく思います。

最後になりますが、歯周診断・再建学分野および高度医療開発センターの先生方には日頃よりご指導ご鞭撻賜り、厚く御礼申し上げますとともに、私自身まだ若輩者ではありますが、新潟大学歯学部の発展に貢献していく所存です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

留学生紹介

# Exiting the safety net: focusing on the next page in Niigata

Division of Biomimetics
Witsanu Yortchan

Getting to know everyone here is fantastic. I am Witsanu Yortchan, a Ph.D. student from Thailand, originally from "Phichit" – my hometown in the northern Thai province.

When I was still working on my master's degree in pediatric dentistry, Niigata University's "Oral life science" program granted me an international scholarship. With the coronavirus outbreak still a significant problem, I couldn't believe I was even in with a possibility of getting international funding. Near the beginning of the trip, the pandemic rose in severity, delaying departure by a semester. Instead of being disappointed by the setback, I used the extra time to prepare myself emotionally and physically for leaving my home country of Thailand.

The beautiful weather in the middle of May and the excitement of finally making it to Niigata have kept me from feeling lonely or sad. Ishida sensei and my Thai friends

provided me with a wealth of helpful information that helped me quickly feel at home in Japan.

My interest in cell culture research led me to this field, which I began pursuing. Despite many already-published studies on the topic, developing a biomimetic grafting material for oral surgery that reduces donor site morbidity and surgical time and expense is still a major area of research and development. Thanks to my professor, Izumi sensei, for helping me become more proficient in the cell culture method and inspiring me to continue my studies in this area. From that moment on, I realized we had a long way to go in our understanding of tissue engineering. Moreover, my Japanese teammates have been really kind and helpful as I transition into my new role, and I attribute a great deal of my positive impression of the workplace to them.

Apart from being a student, I must admit that I am a homebody. Still, the impeccable culture and nature persuade me to explore things around me, especially the exquisite Japanese cuisine that never fails to entice me. Although I've only been in Niigata for a short time, I consider the food here among the best I've ever had.

Despite my six months of experience here, I still have a lot to learn and acquire before I can return to my position as a faculty member in Thailand. I know that life isn't going to be a bed of roses, but I hope that the things that have helped me along the way will continue to strengthen and develop me as I go into the next chapter.

# 留学生紹介

組織再建口腔外科学分野
ZHENG ZHUOYANG

私はZHENG ZHUOYANGです。中国から来ました。中国で日本といえば日本のアニメを思い浮かべますが、私も初めて日本のものに触れたことが日本のアニメです。小学生の頃から友達と一緒に見ていました。今までで大好きなアニメはクレヨンしんちゃんです。

大学で日本の大学を卒業した先生から日本の口腔技術は非常に進んでいると聞いたので、機会があれば勉強したほうがいいと聞きました。大学から卒業した後、インターネットで新潟大学の小林正治教授が日本で権威のある口腔外科医の一人であることを知り、教授にメールを送り、先生に顎変形症について学び続けられることを希望しました。幸いなことに教授が私の先生になることを同意していただき、2019年10月に研究生として組織再建外科に入学しました。毎日、先生方と外来や手術室で研修したり、朝夕病院で廻診をしたりしています。見学期間中にわからない知識があれば、手術が終わった後に先生に聞くことができます。どの先生でもとても優しくて、詳しく説明してくれました。2022年４月に大学院生として入学

北海道神宮

新潟

し、当科で勉強を続けています。大学院生の抄読会が週に一回あるので、最初に長谷部大地先生に発表原稿を直していただきました。その様に、専門的な言葉を教えていただき、日本語が上達しています。現在の先生である齊藤大輔先生にも研究内容を教え、根気強くしていただいています。留学生として日本に来る前は怖くて迷いましたが、日本に来た後、勉強も生活も先生方に助けていただいています。

それ以外、日本に旅行に行くところがたくさんあります。１月１日、東京の浅草寺では日本の新年を深く感じることができます。その日みなさん神社に行って、新年をすごします。それを初詣といいます。参拝した後に御神籤を取って、今年の運勢を占います。でも、私が一番好きなところは雪の日の北海道神宮です。とても静かで道を歩くと雪を踏む音しか聞こえません。また、３、４月に桜、11月に紅葉も美しいと思います。日本の食事も美味しいです。例えば、新潟の笹団子、仙台の牛タン、京都の抹茶などです。

学びでも生活でも私はとても幸せです。

# 退職によせて

## 退職によせて

包括歯科補綴学分野　小　野　高　裕

大阪大学から新潟大学へ赴任させていただいたのが、2014年10月でしたので、2022年12月末でちょうど８年と２カ月になります。本来であれば、2023年の３月をもって定年退職となる予定でしたが、３カ月早い退職が決まり、最後まで任期を全うできないことへの申し訳ない気持ち、慣れ親しんだ新潟を離れることへのさびしさ、新しい仕事（大阪歯科大学歯学部高齢者歯科学講座専任教授）への期待と不安などが入り混じった、とても落ち着かない心境でこの原稿を書いているところです。

新潟大学に赴任した時、私はすでに卒業から30年余り大学で過ごしてきたuniversity dentistでした。その時点で振り返って見た時、10年ごとに研究の節目があったような気がします（図１）。第１期から３期まで、10年ごとの歩みはまことに遅々たるものでありましたが、その間に蓄積したものを活かして新潟大学歯学部での第４期を充実したものにしたいと言うのが、当時の私の思いでした。それは、単に研究においてと言うことではなく、教授職である以上担当する分野の機能、すなわち教育、臨床、研究の３本柱の目標を明確にして、それに向けた取り組みを持続的に推進できる組織を作ると言う意味でした。

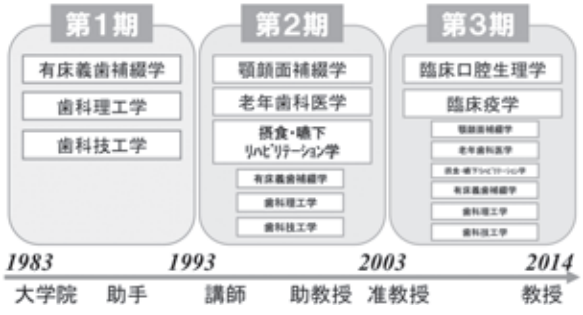



図１　これまでの大学生活を振り返って（2014年）

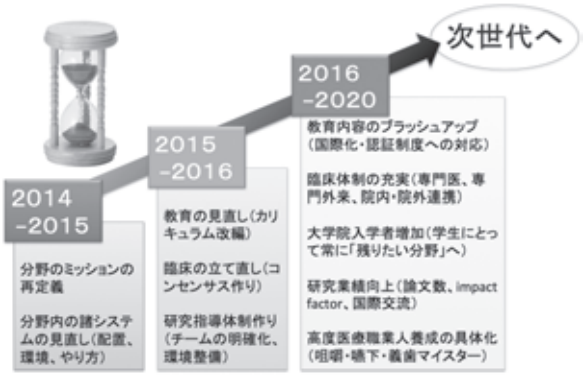



図２　これからのタイムスケジュール（2014年）

そこで、教授選考のプレゼンテーションで示した医局作りのビジョン（図２）が画餅に終わらないよう、就任後改めて教室員の皆さんに詳しく説明し、その後も毎年進行状況を振り返り、年度始めごとに目標を確認しながらやって来ました。しかし、最近３年間はコロナ下の生活となってしまいました。大学生活の楽しみである学会出張や留学どころか、学生や医局員どうしの懇親の機会も失われ、これでは折角入局してくれた若い人たちの士気も下がるのではないだろうか、と心配したのは私だけではないと思います。ところが、この間も大学院生の頑張りで分野の研究業績は伸張し、直近の2022年（１-12月）では17本の英語論文、平均impact factorが５以上を数えるようになりました。また、臨床実習における教授審査の症例から、若手教員の臨床力と指導力の向上を実感することが出来ました。このように私の杞憂とは裏腹に、個々の教室員と組織としての分野が成長してくれたことは何より嬉しいことでした（図３）。

ちょうど10年前から私はfacebookを使うよう

になりました。きっかけは高校時代の同級生との交流でしたので、公開範囲は限定的にしております。また、お互いに無用の気遣いをせぬよう、分野の同僚とは繋がらないようにしました。時々、「先生また僕の写真勝手に出しましたね！」と堀准教授に叱られることはありますが（笑）。縁もゆかりも無かった新潟という土地への単身赴任で目にした風景や味わったもの、その時々の気分は、ほぼFBの中に記録されています。新潟で暮らすことで初めて知ったことや新潟で出会った人たちのおかげで、私の人生は間違いなく豊かになったと思います。それ故、冒頭に書きましたように新潟を離れることのさびしさをひしひしと感じているところです。

ひるがえって、私が新潟で生活することになったのも新潟大学歯学部での仕事があったからこそでした。私と共に苦労してくれた包括歯科補綴学分野の皆さん、親切にご指導いただいた他分野の先生がた、常に仕事がしやすい環境を支えて下さった事務方の皆さんへの感謝を言葉にするのは簡単ではありません。いただいたご縁を大切にして、今後もまだしばらく留まることが許されたアカデミアでuniversity dentistとしての最後の数年を過ごしながら、新潟大学歯学部に少しでも恩返しができればと念じております。

これまでお世話になりありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

図３　2022年12月の医局メンバー

# 退任にあたっての覚書

福祉学分野　高　橋　英　樹

2012年から10年間にわたってつとめてきた職を辞するにあたり、ソーシャルワーカーや教員として約40年間参与的に観察してきた社会福祉のマクロな側面での変遷を、雑駁にではあるが忘備録的に書き記しておきたい。

日本の社会福祉政策は、GHQによる間接統治下で社会福祉政策を所管したPHW（公衆衛生福祉局）によるPublic Assistanceに関する命令（SCAPIN 775）により基本的な枠組みが形成された。さらに、間接統治の終了にあたってPHWから示された6項目提案に基づいて制定された社会福祉事業法により、社会福祉サービスの供給主体はあくまでも中央および地方政府であり、直接的な提供が困難であれば社会福祉法人のサービスを買い取って提供する仕組み（措置費制度）が完成した。こうした社会福祉サービスを政府が専一的にコントロールする仕組みは、資源が極端に不足していた期間に限れば一定の合理性を有していたものの、高度・安定経済成長期を経て日本社会が豊かになるにつれ、当事者ニーズとのミスマッチなどの弊害が目立つようになる。つまり、政府計画に従って資源を配分する計画経済を模した仕組みのもとでは、当事者のニーズを制度という鋳型にあわせるように解釈するような制度運用（＝援助実践）さえ生み出されていたのである。

こうした構造がどのような経緯で転換し得たのか。以下では転換の過程を参与的に観察した経験から得られた認識を、現在ではWebサイトなどで「お得な投資対象」などと喧伝されるほど普及した障害者福祉サービスにおけるグループホーム（以下「GH」）を例に記述する。

1970年代からいくつかの自治体で先駆的に設置されたGHは、1989年のいわゆる「福祉八法改正」時に全国一律の仕組みとして制度化された。制度創設の経緯には興味深いトピックを含むが、紙幅の関係で省略する。いずれにせよ、それまでは「家族のもとか、入所施設か」という二者択一の選択を迫られてきた知的障害者の生活の場に新たな選択肢が提示されたことは確かである。

ところが、制度創設当初には、①利用者は就労（障害者雇用を含む）していることが前提であり、②設置運営は入所施設を運営する社会福祉法人に限定され、③開設の可否は予算に応じて1か所単位で厚生省（当時）が判断するなどの制約が課されていた。つまり、障害程度が重く就労が難しい者は利用対象外であり、小規模作業所などを運営する親の会などは設置運営に参画できず、社会福祉法人が要件を満たして申請したとしても採択されない場合もあるなどの実態があったのである。こうした制約は、1995年のノーマライゼーション7か年戦略（障害者基本計画の重点施策実施計画）の開始にともなって段階的に緩和されていくが、抜本的に見直されたのは2000年施行の介護保険に象徴される一連の制度改革（社会福祉基礎構造改革）以降である。

2006年施行の障害者自立支援法（現在の障害者総合支援法）は、成立過程をとおして部分的にではあるが障害者の置かれた現実を可視化した。国会での審議過程では、利用者負担を介護保険と同様に定率一割負担とすることの妥当性や、いわゆる「福祉的就労」で障害者が受け取る賃金が月額5000円程度である実態などが厳しく問われた。そして、それらが政治上の争点に浮上することで、障害者の置かれた現実が知られることになったのである。法律の成立までに要した衆参両院厚生労働委員会での質疑は14回、延べ76時間45分に及び、障害者をめぐってこれほど長時間にわたる審議が行われたのは1890年の第1回帝国議会以来初めてとされる事態となった。

このような経過で成立した障害者自立支援法では、GHに要する経費はホームヘルプサービスやショートステイなどの在宅支援とともに、それまでの「補助金」から義務的経費である「負担金」によって賄われることになった。これを瑣末な変更と受けとめる向きもあろうと思われるが、GHなどの経費にSCAPIN 775で示された「救済費非制限の原則」が適用されるという重大な変更がなされたととらえることもできる。それにより、障害者自立支援法施行直後の2007年度には4473億円であった障害者福祉サービスにかかる政府予算

は、2022年度には１兆3704億円になるなど15年間で約３倍に増加した。現下の財政下でこの増加幅がいかに驚異的であるかは、この間の国立大学運営交付金の推移と対比してみれば明らかである。

また、それまでの制約から解き放たれたGHの利用も着実に進展する。同法施行前の2005年10月には入所施設利用者数145,919人に対し34,085人にすぎなかったGH利用者数は、2022年３月時点で143,472人と約42倍に増加し、同時点における入所施設利用者数126,815人を上回る。これは、入所施設に変わってGHが障害者の生活の場の主流となり、2002年策定の第２次障害者基本計画に記載された「『障害者は施設』という認識を改める」という理念が現実になったともいえるだろう。付け加えるなら、人々が素朴に信じていた「障害者は（全制的な）入所施設でケアされる」とする社会規範（norm）そのものが、多様な人々の織りなす相互行為をとおして変化し続けているといえるかもしれない。そうした場に、福祉専門職として、そして社会福祉教育に携わる者として部分的にではあるが立ち会えた幸せに深く感謝しつつ、稿を閉じる。

# 論文紹介

## 血中でアンモニアが上昇するとアミロイドβが脳内で蓄積する

口腔生化学分野　照　沼　美　穂

### 研究の背景

アンモニアは、タンパク質代謝の過程で産生される有毒な物質です。我々のからだにはアンモニアを利用する機能や尿として排出する機構が備わっていますが、タンパク質の過剰摂取や薬の副作用、アンモニアの排出異常などがあると、高アンモニア血症を発症します。これは、年齢に限らず発症する可能性がある疾患です。

これまでに、アルツハイマー病患者の血液では高いアンモニア値が報告されるなど、アンモニアとアルツハイマー病の関連性が報告されていました。しかし、その病態機序は明らかではありませんでした。

### 研究の概要・成果

脳では、アストロサイト（星状膠細胞）がアンモニアを利用しています。そこで我々は、ラットの脳からアストロサイトを分離培養し、アンモニアで刺激しました。その結果、アルツハイマー病発症因子の一つであるアミロイドβ（Aβ）の前駆タンパク質であり、細胞膜に発現して機能するアミロイド前駆タンパク質（APP）の発現上昇が観察されました。さらに詳しく調べると、アンモニア刺激後の APPは細胞内に移動していました。通常、細胞内に入り込んだ膜タンパク質は、リソソームに運搬されて分解されます。しかし、APPは主に小胞体に運搬されていました。また、小胞体に移動したAPPはAPP切断酵素によって切断され、凝集性が高く毒性が強いとみられるAβ42が産生されることもわかりました。

培養アストロサイトで得られた研究結果をモデル動物で検討するために、高アンモニア血症マウスを作成して脳を観察したところ、炎症反応や神経変性が観察され、アストロサイト内でのAPPとAβの発現上昇が認められました。このことから、高アンモニア血症を発症すると、アンモニアによるアストロサイトでのAβ産生が亢進し、アルツハイマー病の発症につながる可能性があることがわかりました（図1）。

本研究により、全く新しいアストロサイトを起点としたアミロイドβの産生メカニズムが明らかになりました。

### 今後の展開

これまで神経細胞が産生すると注目されてきたAβですが、アストロサイトでも産生されること、さらにはその過程が小胞体へのAPPの運搬によることが明らかになり、これらがアルツハイマー病治療の新規標的になることが期待されます。

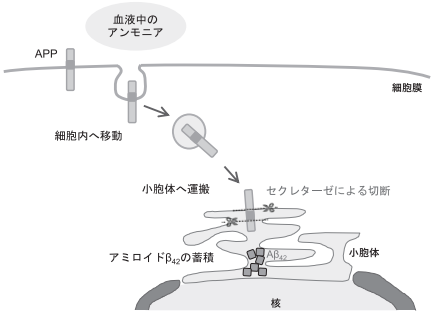



図1：アンモニアによるアストロサイトでのアミロイドβの産生のしくみ

Ammonia induces amyloidogenesis in astrocytes by promoting amyloid precursor protein translocation into the endoplasmic reticulum

Ayaka Komatsu, Izumi Iida, Yusuke Nasu, Genki Ito, Fumiko Harada, Sari Kishikawa, Stephen J Moss, Takeyasu Maeda, Miho Terunuma

*Journal of Biological Chemistry* 2022 May;298(5):101933.

（公社）日本補綴歯科学会 学術賞

# 学会受賞報告

包括歯科補綴学分野　小　野　高　裕

去る令和４年７月15日、大阪国際会議場で開催された（公社）日本補綴歯科学会第131回学術大会において、表記の賞をいただきました。歯科補綴学の分野でuniversity dentistとして40年間歩んできた私としては、専門分野を代表する学会からこうした賞をいただけたことは、たいへん嬉しいことでした。

現職の最終年度にこのような栄誉に浴することが出来ましたが、本賞はとりもなおさず包括歯科補綴学分野の研究活動に対する評価ですので、改めていつも頑張ってくれている分野のスタッフに感謝したいと思います。また、これまでさまざまな共同研究でご一緒してきました歯学部内の他分野、他大学、企業の皆様にも、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

学術賞授賞式の記念写真
左より、水口教授（東京医科歯科大学）、河相教授（日本大学松戸歯学部）、
馬場理事長（昭和大学）、小野。

# 第81回 日本矯正歯科学会学術大会 学術奨励賞受賞報告

歯科矯正学分野　水　越　　優

この度、第81回日本矯正歯科学会学術大会にて学術奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。論文名は「In vivo cell proliferation analysis and cell-tracing reveal the global cellular dynamics of periodontal ligament cells under mechanical-loading」です。

歯根膜細胞の機械的刺激に対する迅速な応答が矯正的歯の移動を可能としていますが、組織改変を担う細胞の由来は解明されていません。本研究は、力学的刺激に対する組織の初期応答の一つであり細胞供給に重要な細胞増殖活性の変化を解析しました。マウス臼歯にコイルを装着して矯正力を負荷し、歯根膜組織を観察しました。結果、機械的刺激の負荷されたマウス臼歯歯根膜の細胞供給は特定の細胞が担うのではなく、多様な細胞が担っていることが示唆されました。

最後になりましたが、齋藤功教授をはじめとする歯科矯正学分野の先生方、生体歯科補綴学分野の魚島勝美教授、加来賢准教授、ならびにご支援いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。

授賞式にて（筆者左）

# 2021年度日本歯周病学会会誌賞を受賞して

歯周診断・再建学分野　高　橋　直　紀

この度、2021年度日本歯周病学会会誌賞を受賞しましたので報告いたします。本賞は日本歯周病学会が発行する学会会誌に掲載された論文のうち、年ごとに優れた論文を表彰するものです。受賞論文は「超音波スケーラーから発生するエアロゾルの特性と口腔内外吸引装置による拡散防止効果の検討（日本歯周病学会会誌第65巻４号掲載）」です。

超音波スケーラーから発生するエアロゾルが新型コロナウィルスの交差感染リスクとして懸念されており、そこから本研究の着想を得ました。異分野融合研究を推進する新潟大学U-goグラントの助成を受け、本学工学部の先生方のご協力の下、微粒子可視化システムを用いた流体工学的検討によって超音波スケーラーから発生するエアロゾルの特性を明らかにしました。また感水試験紙およびパーティクルカウンターを用いた模擬臨床試験において、口腔内外バキュームの使用により超音波スケーラー由来のエアロゾル飛散が大きく減少することを確認し、吸引装置の適切な使用が交差感染リスクを抑制できる可能性を示しました。

本実験の遂行において、共同研究者である工学部の山縣貴幸先生および加藤光太先生にこの場を借りて感謝申し上げます。また、研究立案・データ解析および論文執筆においてご指導を賜りました多部田康一教授ならびにご協力頂きました全ての先生方に心より感謝申し上げます。

筆者（左）とご指導いただいた多部田教授（右）

# 最終選考最優秀賞 1 位受賞報告

歯学科 6 年　青　森　裕　大

この度、日本補綴歯科学会主催の学生技能コンペティション「第 4 回 JPS student clinical skills competition」において、最終選考最優秀賞 1 位を受賞しましたので、ご報告いたします。

課題はCAD/CAM冠を想定した下顎左側第一小臼歯の支台歯形成でした。形成練習では、人工歯や形成用のバー等を用意していただいただけでなく、形成した歯を 1 本 1 本評価し、ご指導いただくなど、非常に恵まれた環境で練習することができました。また、今年は最終選考が開催され、他大学の学生や先生方との交流により多くの刺激を受けるなど、良い機会にも恵まれたと感じています。

最後に、お忙しい中ご指導いただきました魚島先生、江口先生はじめ冠ブリッジ診療科の先生方に厚く御礼申し上げます。この結果に満足することなく、患者さんの健康な生活に貢献できる歯科医師になれるよう、今後ともより一層精進してまいります。

受賞報告の様子

# 第17回先端歯学スクール2022 優秀賞受賞報告

生体歯科補綴学分野　小　野　喜　樹

この度、第17回先端歯学スクール2022にて優秀賞を受賞致しましたので御報告申し上げます。先端歯学スクールは、本邦の基礎および臨床歯学の教育研究を最先端のそれに匹敵する水準に維持することを目的とする先端歯学国際教育研究ネットワークが主催する若手人材交流の場で、教育講演とともに各大学で選抜された大学院生による研究発表が行われます。

私は、「歯周組織再生過程におけるWnt/β-cateninシグナルの亢進はセメント質の形成を促進する」という演題で発表をさせて頂きました。歯根膜は口腔機能において重要な役割を担っていますが、未だ予知性の高い再生方法は確立されておりません。そこで本研究では、歯根膜の再生メカニズム解明の端緒として、歯根膜の再生に重要であると考えられるセメント質の再生に寄与するシグナルの同定を試みました。マウスの腎被膜下に臼歯を移植して異所性に再生させた歯周組織をモデルとして各種解析を行い、Wnt/β-cateninシグナルがセメント質再生に重要な役割を果たしている可能性を明らかにしました。

最後に、先端歯学スクールでの発表の機会をいただきました多部田康一教授および構成委員の先生方、また本研究の遂行にあたり御指導賜りました魚島勝美教授、加来 賢准教授、研究にご協力いただきました先生方に心より厚く御礼申し上げます。

著者（右）

# 日本結合組織学会第54回学術大会 Young Investigator Award受賞報告

# 日本補綴歯科学会第131回学術大会 課題口演賞受賞報告

生体歯科補綴学分野　土　橋　　梓

この度、日本結合組織学会第54回学術大会ポスター発表にてYoung Investigator Award、日本補綴歯科学会第131回学術大会にて課題口演賞を受賞致しましたのでご報告申し上げます。

歯科臨床の場で遭遇する局所的な歯槽骨の吸収や病的な歯の動揺は、既知のメカニズムである歯周病原細菌による炎症や、応力の集中だけでは説明できないことも少なくありません。そこで私たちは通常の咬合力負荷でも重度の歯周組織破壊を呈するPeriostin-Knockoutマウスをモデルとし、多階層の包括的データを統合的に解析するマルチオミックス解析の手法を用いて、組織破壊に関わる経路のノンバイアスな探索を試みました。解析の結果、Periostinの欠失は細胞外環境の変化としてLaminin-Integrin系により検知され、細胞外マトリックスの分解系を活性化させている可能性が示唆されました。今後は本研究で示唆された経路について実験科学的手法により検証を進め、その上流にある因子を同定して臨床的な意義を見出したいと思います。

最後に本研究の遂行にあたり御指導賜りました本分野の魚島勝美教授、加来　賢准教授をはじめ、ご協力いただきました先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

第131回日本補綴歯科学会表彰式にて

第71回日本口腔衛生学会・総会 優秀発表賞

# 学会受賞報告

口腔生命福祉学講座　中　村　夢　衣

この度、第71回日本口腔衛生学会・総会における研究発表（口演）において優秀発表賞に選ばれましたことご報告いたします。

発表演題は、「脳卒中と歯の喪失および身体活動量について：魚沼コホート研究」です。脳卒中と歯の喪失との関連では相反する結果が報告されており、今回の研究では脳卒中発症と歯の喪失の関連について、身体活動量を媒介要因としてそれぞれの関連について検討を行いました。その結果、脳卒中発症に歯の喪失が関連し、身体活動量が関連要因として関わる可能性が示唆されました。今後は新たな視点からの検討をしていければと考えております。

最後になりますが、今回ご指導いただきました口腔生命福祉学講座の葭原明弘教授、柴田佐都子准教授、諏訪間加奈先生、東京都健康長寿医療センター研究所自立促進と精神保健研究チームの岩﨑正則先生に感謝申し上げます。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

著者本人

# 技工部だより

歯科技工部門　長谷川　健　二

歯科技工部門の長谷川健二と申します。僭越ながら歯科技工部門の紹介をさせていただきます。

さて、当部門ですが令和４年12月現在、５名の職員が在籍しており、外来診療棟５階中央技工室にて、クラウンからデンチャー、様々な口腔内装置など、幅広く製作しております。そして一昨年CAD/CAM機器の新規導入に伴い、補綴物の製作や、機能を利用することで日々の業務に役立てております。

それではCAD/CAM機器について少し説明を加えますと、このたび導入された機器はAmann Girrbach社のceramillというシステム一式でCAD用PC、モデルスキャナー（ceramill map600）、切削加工機（ceramill motion２）、シンタリングファーネスが含まれ、保険のCAD/CAM冠、ジルコニア、PMMAやワックスの切削加工が可能となりました。また、スキャンデータやデザインデータをSTLデータとして取り出せるため、３Dプリンタを併用して立体造形ができ、利便性が増しています。

当部門の３Dプリンタですが、以前、本誌の技工部だよりに紹介されている３Dプリンタ（Form２）の後継機のForm３Bを導入しております。Form２同様、光造形方式のプリンタで主に実物大臓器モデルの製作に使用しております。

病院勤務の技工士として多様化する業務を遂行するうえで、CAD/CAM機器の補助は欠かせないものとなっており、職人として腕を磨く傍ら、これらを使いこなすための知恵や技術を身につけなければいけないと強く考えております。

簡単ではありましたが、歯科技工部門の紹介とさせていただきます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

左からceramill map600，ceramill motion２，Form３B

# 受章にあたって

元診療支援部副部長・歯科技工士長　木　村　修　平

この度、令和４年春の叙勲におきまして、瑞宝単光章を受章いたしました。

この様な名誉ある褒章をいただけるとは夢にも思っていませんでしたので、とても感激しております。

私が受章できたのは長年の歯科技工士としての業務が認められたのだとおもいますが、それは歯科技工部門をはじめ、歯科の先生方や歯科衛生部門の皆さん、その他多くの方々に支えられての事であり、心から感謝申し上げます。

昭和54年に新潟大学歯学部附属歯科技工士学校を卒業し、そのまま新潟大学歯学部附属病院に就職しました。私が大学病院技工室を希望した理由は義歯、Cr.-Br.を含め、各種の技工を行いたいと思ったためです。当時、技工所に就職すると、

瑞宝単光章

病院長より春の叙勲伝達式の様子
（医歯学総合病院HPより）

まず義歯部門とCr.-Br.部門に分かれ、それぞれが専門的に担当する形態が取られていました。新潟大学歯学部附属病院技工室では多種の技工を行っており、ある程度の時間に余裕をもって業務する事が出来たので、研究やトレーニングも可能でした。また各学会や講習会等に参加し、学術習得の場も多かったと思います。今、勤務した40年を振り返ると様々な思い出が浮かんで来ますが、あっという間に過ぎた様にも思います。困難な事も多々ありましたが、皆さんの御助力で乗り越えられたと感謝しております。

最後に新潟大学歯学部並びに病院職員の皆様のご健勝、ご発展を心よりお祈り申し上げます。

# 新潟歯学会報告

## 令和 4 年度　新潟歯学会例会報告

令和 4 年度新潟歯学会集会幹事
小児歯科学分野
大　島　邦　子

令和 4 年度新潟歯学会第 1 回例会は、 7 月 9 日（土）に歯学部講堂で開催致しました。令和 2 年からはコロナ禍で新潟医療人育成センターを使用しておりましたので、歯学部講堂での開催は 2 年ぶりとなりました。 5 題の一般口演に引き続き、「地域歯科口腔保健のこれから―変わるもの変わらないもの―」と題して、濃野 要 先生（口腔生命福祉学講座　口腔保健学分野）による教授就任講演が行われました。学外 2 名を含む75名（Zoom参加30名）の参加がありました。

11月12日（土）には第 2 回例会を、同じく歯学部講堂で開催致しました。学外 5 名を含む109名（Zoom参加48名）の会員にご参加をいただき、一般口演21題の発表が行われました。歯学部講堂とはいえ、感染対策のため、会場参加者は評議員と共同演者に限らせていただいておりましたが、活発な質疑応答がなされました。また、Zoom参加者数も過去最高となりました。

総会、第 1 回例会、第 2 回例会において、お忙しい中、座長をお引き受けいただいた先生方をはじめ演者の方々やご参加いただいた会員の皆様のご協力により、令和 4 年度の新潟歯学会を滞りなく終了できましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

令和 5 年度も引き続き小児歯科学分野が集会係を担当させていただきます。第56回新潟歯学会総会は 4 月15日（土）に開催予定ですが、感染拡大状況によっては、日時および開催場所が変更になる可能性もありますので、詳細は新潟歯学会ホームページをご覧ください（https://nds.dent.niigata-u.ac.jp/）。

第一回例会　教授就任講演
濃野 要 教授

第一回例会　会場風景

第二回例会　質疑の様子

# 同 窓 会 だ よ り

## 同窓会だより

副会長　野　内　昭　宏

7月17日（日）に、多数の方々のご参列をいただいて当同窓会の創立五十周年記念式典並びに祝賀会を盛大に挙行できました。関係各位には、改めてお礼申し上げます。

ところで、周年記念事業は大きな事業ではありますが、通常の活動も滞りなく行われています。

例えば、卒業年次の学生（歯学科6年生・口腔生命福祉学科4年生）に対して、資料を作成・配布したりビデオも作成して視聴してもらうことで、同窓会への理解を深めていただくこともしました。（写真1、2）

本当はリアルな会合で、（もちろん適切な感染予防処置をしての上ですが）もう少し濃厚なふれあいをして顔をつなぎ、卒業後においては同窓会の一員として新潟大学歯学部同窓会を盛り上げていただき、逆に縦横を含めた仲間である同窓会を卒業後の拠り所の一つとしての認識を持っていただくことも、この行事の目的のひとつです。しかし、昨今の社会情勢からはそれが叶いません。非常に残念です。早く改善されればと思います。

さて、当同窓会は、新潟大学全学同窓会のメンバーでもあります。10月15日（土）には全学同窓会交流会講演会・懇親会が行われました。学部は違えども、同じ新潟大学で学んだ仲間ということで、他学部の方々とも懇親を深めました。（写真3、写真4）

写真1、2　卒業年次の学生（歯学科6年生・口腔生命福祉学科4年生）に対して作成したビデオから

写真3　渡邊健一氏（石本酒造株式会社）による講演会。題名はズバリ「新潟の酒はなぜ美味い～美味しいお酒の背景～」

写真4　参加した歯学部関係者
（前列右端は臼杵全学同窓会長）

全国28大学の歯科大学・歯学部同窓会を対象とした「全国歯科大学同窓・校友会懇話会」や、12の国公立大学歯学部同窓会が構成員となっている「国公立大学歯学部同窓会連絡協議会」等を通じて、外部組織との情報交換をすることも重要です。同窓会員は全国津々浦々にいらっしゃいますので、他大学の方から動向を伺うことも多々ありますし、逆に県内にいらっしゃる他校の方の動向が話題に出ることもあります。（写真５）

ICTの発達で、世界のどの地にいても瞬時にcommunicationを取ることが不可能ではなくなってきています。しかし、最終的には人と人との繋がり、絆が重要かと思います。当同窓会も50周年記念事業のテーマ「人と人とが繋がり、さらに強い絆を」を胸に、さらなる活動をしていく所存です。

写真５　国公立大学歯学部同窓会連絡協議会の一コマ

## ドナルド・マクドナルド・ハウス にいがた設立に寄付

会長　有　松　美紀子

令和４年10月、新潟大学医歯学総合病院敷地内（康楽会館跡地）に「ドナルド・マクドナルド・ハウス にいがた」が開設されました。自宅から離れて入院しているお子さんとご家族は、経済的負担や家族が離れ離れで暮らす精神的苦痛に悩まされています。このようなお子様とご家族の「第２の我が家」としてサポートするために、また、病気の子どもたちに笑顔を届けることを目的として当施設は設立されました。公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリテーズ・ジャパン（DMHC）が運営をしています。

2019年に新潟大学医歯学総合病院長　冨田善彦氏を代表とした募金委員会が発足し、当会も同窓会の使命の一つである「社会への貢献に寄与する」ために、皆様からの貴重な会費の一部を寄付させて頂きました。会員の皆さまには心から感謝申し上げます。

「ドナルド・マクドナルド・ハウス にいがた」全景

10月末に事務局の五十嵐さんと内覧に伺い、写真撮影させて頂きましたので写真と共に報告致します。施設内は感染対策と安全管理対策が施され、利用されるご家族がスムースに日常生活が送れ、ゆったりと寛ぎ、孤独感を軽減できるように他のご家族とも交流ができるように配慮されたつくりになっています。ボランティア登録者は300名で、随時、寄付金や寄付の品物を受けつけています。

医療の進歩により今後も利用されるご家族が増えていくことが予想されます。一人でも多くの子どもたちがご家族と安心して過ごし、治療を受け、元気になってご自宅に帰られることを願っています。

寄付者を掲出しているデジタルサイネージ

## 学術セミナーⅡ『見逃すな！、口腔粘膜の異常』を聴講して

歯学科36期生　塚　田　哲　也

普段、歯科診療に従事していると、多種多様な口腔粘膜の異常に遭遇します。その度に、頭の中の知識の引き出しを開け、また、今までの経験を思い起こし、日々の診療で患者様に説明し、対応していかなければなりません。特に稀な症例に出会うと説明しながら、自分の知識があっているのか不安になることもあります。不安になると、診療後に本棚の奥から書籍を探し出して、もう一度確認することが日常茶飯事です。歯科診療の中でも、華やかなインプラント治療や審美治療などは、様々な場面で情報が入ってくるので忘れることはありません。しかし、多種多様な口腔粘膜疾患には、稀なものも多く、そうはいきません。

今回、ZOOM形式にて鈴木一郎先生による『見逃すな！、口腔粘膜の異常』と題した講演が配信されました。90分間という短い時間でしたが、口腔粘膜疾患・異常の特徴から最新の話題まで幅広く、明日からの日常臨床でも活用できる多くの情報が盛り込まれた素晴らしい内容の講演でした。また、講演後の質疑応答の時間では多くの質問があり、講演の内容の奥深さを物語っています。

さて、講演の内容について感想をお伝えしたいのですが、あまりに内容の幅が広いため、自分の臨床経験とリンクして特に印象的な部分を抽出してお伝えさせていただきます。

講演中の鈴木先生

視聴中の皆様

先生は、押さえておくべきポイントとして、個々の疾患と特徴、鑑別疾患の要点、皮膚疾患や全身疾患との関係、そして、病院歯科と医科との連携対応についてご提示されておりました。この中でも皮膚疾患や全身疾患との関係と医科との連携対応が印象的でした。私は卒後17年間で１症例だけ尋常性天疱瘡を診断し、新潟大学医歯学総合病院との連携を続ける経験があります。その方には、『なんだかわからないと不安だけど、一発で先生に見つけてもらって良かった。』と感謝され、何年も僕のことを指名で月１回来院して頂いております。実は、この診断をする前の日に、たまたま違う症例で口腔粘膜異常の書籍を読んでいて、自信をもって詳細に説明し、迅速に医科との連携に繋げられました。この経験は単なる運でしたが、本講演内容であった押さえておくべき４つのポイントは本当に大切なことだと思います。普段より４つのポイントを常に頭に入れておくことが必要だと感じました。

また、扁平苔癬についても印象的です。扁平苔癬は日常臨床の中でよくみかけます。とくに定期健診で来られる患者様で、来院される度に症状の程度が変わったりします。症状があるとステロイド軟膏を処方しますが、次回来院時に「塗ってもあんまり変わらない。」と言われると、少し凹み、「ちょっと良くなりました。」と言われると、ほっとする毎日です。その度に他の先生はどう対応しているのだろうと思っていました。本講演では多くの症例を提示していただき、口腔粘膜疾患のエキスパートである鈴木先生も扁平苔癬では試行錯誤されていたということでした。

そして、薬剤の副作用による口内炎についてもお話がありました。思い起こすと、アクテムラが処方されている方が、「最近よく口内炎になる。」とおっしゃっていて、「そうですかぁ。」と流していましたが、話を聴いて合点がいきました。この時、しっかりと説明できていれば、歯科医師としての評価も違っていたかもしれません。

歯科医師はとかく技術に重きを置きがちになりますが、知識の重要性を再認識させられる有意義な時間でした。鈴木先生、ご講演ありがとうございました。

## 学術セミナー『歯周再生療法のディシジョンメイキング』を受講して

歯学科42期生　松　川　由　実

早いもので、大学を卒業して10年が経ちました。昨年まで新潟大学の歯周病科に所属しておりましたが、現在は小児歯科や訪問歯科にも取り組む歯科医院に勤務しており、日々大学にいたころとは違った学びを得ています。歯周再生療法をする機会は減ってしまいましたが、この分野で大変著名な岩野義弘先生のセミナーということで、最新の治療を学びたいと思い受講を決めました。

歯周再生療法では、適応か否かに始まり、術式や再生材料、切開および縫合方法の選択など多くのディシジョンメイキングが必要となります。今回のセミナーでは、その決め手となるエビデンスが示された上で、実際の症例を見ながら解説を聞くことができ大変勉強になりました。これまで同様のセミナーを受講した経験が何度かありますが、これほど多くの症例について、CT画像や術中の動画を含む詳細なデータと共に、長期の予後まで見せていただいたことは初めてでした。なかには、ほとんどの歯科医師が抜歯を選択するだろうという状態の歯もありましたが、徹底した歯周基本治療後、適切なディシジョンメイキングを行い、それらを実現する環境と高い技術力があれば保存ができるということを目の当たりにし、歯周再生療法の大きな可能性を感じると同時に、自分自身の未熟さを痛感しました。より多くの選択肢を提示できる歯科医師になれるように、もっと努力をしていかなくてはと気持ちを新たにしました。

今回、現地とオンラインとのハイブリット開催、かつオンデマンド配信もしてくださったことで、子育て中ですがセミナーに参加することができました。新型コロナウイルスの感染対策のために現在でもさまざまな制限が続いていますが、以前よりも気軽にいろいろな学会やセミナーにオンラインで参加ができるようになったことは、個人的にコロナ禍での唯一の良かったことだと感じています。

最後になりますが、このような貴重な機会を提供してくださった同窓会の皆様、講師の岩野義弘先生に感謝申し上げます。

講演会場の様子。今回はハイブリッド開催＋
オンデマンド配信で行われました。

質疑応答での一コマ

◇ ミ ニ コ ラ ム ◇

歯学部を支える方々

# 未来に向けて

歯学部事務室長　清　野　　暁

令和４年４月に歯学部事務室長に着任しました清野と申します。

現在、歯学部事務室は12名の職員が在籍し、学生のサポートやカリキュラム支援などを行う学務係と、管理運営の事務的サポートを行う総務係があります。これからもより良いサポートが出来るようがんばっていきますので、よろしくお願いいたします。

私は、五十嵐キャンパスの事務局にあります財務部から異動してきました。それ以前は、平成21年から平成29年まで９年間を歯学部の隣にあります大学病院で勤務しておりました。新潟大学の事務職員として入職してから大学病院と財務部の勤務が殆どで、学生と直接対応する部署は、久しぶりです。

歯学部の第一印象は、「学生の皆さんが校舎に居る」です。学生の皆さんが教室で授業を受けている様子や休み時間に談笑しているのを見かけると「大学だな」とか「これが大切だな」と感じています。

コロナ禍当初の五十嵐キャンパスでは、学生がいなくなってしまい、ゴーストタウンの様な非常に寂しい時期もありました。知っている学生さんも多いのではないでしょうか？今でもマスクなしの生活には戻っておらず、大学でのイベントや交流活動など以前のように行えないことも多々ありますが、もうすぐ様々な活動が活発に行える未来が来ることを願っています。

さて、最後に自己紹介です。体を動かすことが好きでマラソンや草野球などを楽しんでやっています。見かけはスポーツマンには…なオジサンですが、まだまだ出来ると思い込んでいます。近年はコロナ禍を言い訳にしてサボり癖が付いてしまいましたが、これを書いている日は、サッカーW杯開催中で日本代表がスペインに見事に逆転勝利しました（ブラボー！）、私も令和５年度に向けてモチベーションを上げていこうと思います。

歯学部事務室での様子

# 歯学部への異動に際して

歯学部事務室総務係　小　野　雅　生

令和４年の春にお隣の医歯学系総務課より歯学部へ異動して参りました、小野雅生と申します。新潟大学を卒業後、令和２年４月に新採用となり、そこから２年間医学科におりましたので、今回が初めての異動になります。何分にも未熟者ですので、折にふれてご指導賜りますようよろしくお願いいたします。

総務係においては前任の中川さんが担当されていた業務を引き継ぎ、主に予算管理や契約手続き、建物管理などを担当しております。これまで経験したことのない、学部全体という大きな規模の予算運営に携わることができ、貴重な機会をいただいております。先生方におかれましては、予算の執行や備品の購入・廃棄について、もしくは工事のご相談などありましたらお気軽にお声がけいただければと思います。

さて、日頃より予算の適切な執行にご協力いただきありがとうございます。歯学部に来て感じたのは、会計ルールに対して先生方が非常に真摯に向き合っているということです。若手の先生方から教授の先生方までハンドブックの内容をよくご理解いただき、もしくは不明点がある場合も、その都度事務までご確認いただいております。実際、学部の予算規模を踏まえて考えると、歯学部で発生する会計ルールの違反事例は少ないと感じます。そんな先生方の一助となれるよう精一杯努力しなければと、身の引き締まる思いで日々業務にあたっています。

最後に私の趣味について少し触れさせていただくと、温泉と映画館が好きでどちらも月一ペースで通っています。温泉は遠くの旅館まで足を伸ばして味わうというのも最高ですが、地元の秋葉区周辺の小さい温泉に散歩気分でひとっ風呂というのが最近のマイブームです。また、映画館はデッキー401に入っているユナイテッド・シネマが好きで、仕事終わりに直行できるという旭町地区勤務最大（？）のメリットをありがたく享受している今日この頃です。

歯学部事務室にて

# 教　職　員　異　動

## 学　部

### 【教員等】

| 異動区分 | 発令年月日 | 氏名 | 異動後の所属・職 | 異動前の所属・職 |
|---|---|---|---|---|
| 任期満了 | R４．９．30 | 大　竹　正　紀 | | 歯科矯正学分野助教 |
| 任期満了 | R４．10．31 | LAY THANT | | 高度口腔機能教育研究センター特任助教 |

### 【事務等】

| 異動区分 | 発令年月日 | 氏名 | 異動後の所属・職 | 異動前の所属・職 |
|---|---|---|---|---|
| 昇任 | R４．10．１ | 小　西　　充 | 医歯学系歯学部事務室総務係長 | 医歯学系総務課主任 |
| 異動 | R４．10．１ | 丸　山　　俊 | 医歯学総合病院総務課総務係長 | 医歯学系歯学部事務室総務係長 |
| 異動 | R４．10．１ | 石　栗　真理子 | 医歯学系歯学部事務室学務係主任 | 自然科学系工学部事務室学務係主任 |
| 異動 | R４．10．１ | 土　田　彩　乃 | 医歯学総合病院総務課総合臨床研修係 | 医歯学系歯学部事務室学務係 |
| 異動 | R４．10．１ | 大　野　真　琳 | 歯学部事務室総務係事務補佐員 | 旭町地区業務支援室 |
| 退職 | R４．10．16 | 中　村　麻　実 | | 歯学部事務室総務係事務補佐員 |
| 退職 | R４．11．30 | 小　杉　香　澄 | | 組織再建口腔外科学分野事務補佐員 |
| 採用 | R４．12．１ | 高　橋　泰　子 | 組織再建口腔外科学分野事務補佐員 | |

## 病　院

### 【教員等】

| 異動区分 | 発令年月日 | 氏名 | 異動内容 | 異動前の職名 |
|---|---|---|---|---|
| 昇任 | R４．９．１ | 金　丸　博　子 | 医療連携口腔管理治療部講師 | 歯科麻酔科助教 |
| 退職 | R４．９．30 | 竹　山　雅　規 | | 矯正歯科講師 |
| 昇任 | R４．10．１ | 髙　橋　功次朗 | 矯正歯科講師 | 矯正歯科助教 |
| 配置換 | R４．11．１ | LAY THANT | 矯正歯科特任助教 | 高度口腔機能教育研究センター特任助教 |
| 採用 | R４．12．１ | 山　本　　徹 | 歯科麻酔科助教 | 歯科麻酔科医員 |

### 【看護・診療支援部】

| 異動区分 | 発令年月日 | 氏名 | 異動内容 | 異動前の職名 |
|---|---|---|---|---|
| 採用 | R４．７．19 | 大　島　千　鶴 | 歯科衛生部門歯科衛生士 | |
| 育児休業 | R４．10．16 | 由　利　由　依 | | 歯科衛生部門歯科衛生士 |
| 採用 | R４．11．21 | 中　村　夢　衣 | 歯科衛生部門歯科衛生士 | |
| 退職 | R４．８．31 | 板　垣　文　佳 | | 東３階病棟看護師 |
| 所属換 | R４．10．１ | 小　林　愛　夢 | 西４階５階病棟看護師 | 東３階病棟看護師 |
| 所属換 | R４．10．１ | 椿　　華　奈 | 東３階病棟看護師 | 東９階病棟看護師 |
| 育児休業 | R４．10．30 | 宮　本　文　美 | | 東３階病棟看護師 |

### 【事務部】

| 異動区分 | 発令年月日 | 氏名 | 異動内容 | 異動前の職名 |
|---|---|---|---|---|
| 配置換 | R４．10．１ | 小　嶋　貴　幸 | 総務課専門職員（地域医療推進係長兼務） | 総務課総務係長 |

# 編 集 後 記

私は今回、初めて歯学部ニュース編集委員を務めさせていただきました。つい最近、歯学部ニュースに原稿を掲載していただいたばかりでしたので、短い期間に執筆と編集、両方の立場を経験することができました。このことから、歯学部の活動をより良く広く知っていただくために、多くの方にご尽力いただいていることを改めて実感しました。

最後になりましたが、御多忙中の執筆依頼にも関わらずご快諾いただいた先生方、学生の皆さんにこの場をお借りして厚く感謝申し上げます。

歯科矯正学分野　大森 裕子

ご多忙の中、執筆をご快諾頂いた先生、学生の皆さまにこの場を借りて深く御礼申し上げます。言語聴覚士として、歯学部ニュースの編集に関わることが出来たのは恐縮の極みでございましたが、大変得難い経験をさせて頂きました。貴重な機会を与えてくださった編集長の土門先生には、心より感謝申し上げます。私は、主に学生の皆さまの原稿を担当させて頂きましたが、その一つ一つが新潟大学歯学部の新たな歴史を彩り、積み上げていく記録のように感じました。この雑誌を手に取られた皆さまのご多幸を心よりお祈り申し上げます。

摂食嚥下リハビリテーション学分野　落合 勇人

この度はお忙しいなか、原稿執筆にご協力いただきました先生、学生の皆さまに感謝申し上げます。今回初めて編集に携わりましたが、この歯学部ニュースが多くの方々のご協力によって出来上がっていることを知ることができました。まだまだコロナ禍が続き、対面での交流の機会が限られていますが、この冊子がお互いを知る機会の一つとなってほしいと願っています。至らない点が多かったと思いますが、編集に携わることができ大変光栄でした。まことにありがとうございました。

口腔生命福祉学分野　松本 明日香

コロナ禍の序盤に新潟大学に赴任して以来、他分野の活動の情報源として定期的に発刊される広報誌「歯学部ニュース」をいつも楽しみにしております。今回、同誌の編集を担当させていただき、非常に魅力的な広報誌になるようにたくさんの方が貢献されているのを実感しました。今後も「歯学部ニュース」をより一層楽しみをもって拝読させていただこうと思います。最後になりましたが、この度はお忙しい中、原稿の執筆にご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

包括歯科補綴学分野　村上 和裕

この度、歯学部ニュース142号の編集長を務めさせていただきました。新型コロナウイルス感染症が世界的に拡大して約 3 年が経過しました。これまで本誌ではコロナウイルス関連の特集を多く組んでまいりましたが、本号ではコロナ禍以前の記事編成を意識しつつ、3 つの特集を組みました。特に、留学特集では海外での充実した研究生活を垣間見ることができました。研究留学に興味を持たれた学生さんも多いのではないかと推察します。原稿執筆に快くご協力いただきました先生方、職員の方々および学生さんに厚く御礼申し上げます。新潟大学歯学部の活動を発信する広報誌として本誌をお役立ていただけましたら幸いです。

微生物感染症学分野　土門 久哲

**歯学部ニュース**

令和４年度第２号（通算142号）

発　行　日　　令和５年３月１日
発　行　者　　新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者　　土門　久哲、寺尾　　豊
編 集 委 員　　大森　裕子、落合　勇人
　　松本明日香、村上　和裕
印　刷　所　　㈱ウィザップ

**表紙・裏表紙写真の説明**

表紙の撮影データ：
撮 影 地：新潟県妙高市（苗名滝）
撮 影 日：2022年10月
使用機材：OLYMPUS PEN-F／M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0／絞り：F2.8・シャッター速度：1,600分の1秒

裏表紙の撮影データ：
撮 影 地：新潟県燕市（大河津分水洗堰）
撮 影 日：2022年5月
使用機材：OLYMPUS PEN-F／M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO／絞り：F8・シャッター速度：800分の1秒

コメント：今号では川の流れにまつわる日本の百選つながりということで、表紙には、日本の滝百選から紅葉の苗名滝（なえなたき）を、裏表紙には日本のさくら名所百選から通水百周年を迎えた葉桜の大河津分水（おおこうづぶんすい）を被写体にしました。
苗名滝は、新潟県と長野県との県境を流れる関川にかかる滝であり、美しい柱状節理の玄武岩壁から落差55mを豪快に流れる様を見せ、その轟音はまるで地震が起こっているように感じることから別名、地震滝とも呼ばれているようです。古語で地震を意味する「なゐ」が名前の由来とのことです。
大河津分水は、信濃川が日本海に最も近づく場所の全長約10 kmを繋いだ人工水路で、信濃川の水を日本海へ分流して越後平野を水害から守っています。1922年（大正11年）に通水し、2022年8月25日には百周年を迎えました。2019年10月の台風19号の猛威の折に、守り神が瀬戸際で越後平野を守りきったことは記憶に新しいところです。

本誌中の写真の使用機材
ボ デ ィ：OLYMPUS PEN-F, OLYMPUS E-M5 Mark II, SONY α900（DSLR-A900）
レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0, Distagon T* 24mm F2 ZA SSM

撮 影 者：林　孝文

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。